

宿久庄西遺跡 1

平成 28 年（2016 年）3 月



茨木市教育委員会

序 文

茨木市は大阪の北部に位置し、北は老の坂山地を介して京都府亀岡市と接します。市域の北部は広大な森林をもつ山々が連なり、そこから流れる安威川、佐保川、茨木川、勝尾寺川などにより、市域南部の平野に豊かな水をもたらしています。古くから、北部には山々への信仰とともに人々が暮らし、南部の各河川流域には、豊かな自然と温暖な気候に恵まれ、多くの人々が生活を営んでいました。その先人たちの足跡の多くが埋蔵文化財として今も土中に残されています。

ここで報告する宿久庄西遺跡は茨木市の中央部の西端、箕面市との市境に位置しています。遺跡の南方に通る古代の山陽道をなぞった「西国街道」は、西国二十三番札所勝尾寺参詣など、神戸方面へ抜ける主要幹線道路としての役割を担っていました。現在は、西国街道に沿うように国道171号線が通っており、周辺の開発が進んでいます。

現地調査では、飛鳥時代から奈良時代の建物跡や土坑など多数の遺構が見つかりました。また、出土遺物の中には古代の硯も確認されました。このことは文字を書く必要のある人たちが、この地に集落を営んだことを物語っています。今回の発掘調査によって、茨木市の古代の様相を明らかにするうえで新たな知見となる貴重な成果を得ることができました。

最後に、今回の調査を実施するにあたりまして、多大なご協力とご配慮をいただきました土地所有者、近隣の皆様をはじめとする関係各位に対し、深く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月31日

茨木市教育委員会

教育長 河井 豊

例　　言

1 本書は平成6年度及び、平成27年度に実施した茨木市清水1丁目地内に所在する宿久庄西遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は事業者からの届出・依頼を受け、茨木市教育委員会が行った。

3 平成6年度の発掘調査〔SHW94-2〕については、発掘調査員 宮脇 薫（平成22年退職）が担当した。また、平成27年度の発掘調査〔SHW15-1〕・遺物整理に係る調査体制は以下のとおりである。

教育総務部 社会教育振興課長 森岡恵美子、文化財係長 前田聰志、主査 黒須靖之、
発掘調査員 藤田徹也・坂田典彦・正岡大実

〔SHW15-1〕

担当者 嘴託調査員 水久保祥子

〔遺物整理〕

担当者 嘴託調査員 川村和子・木村健明・水久保祥子

4 出土遺物の整理作業については、その一部を国際文化財株式会社に委託し、茨木市立文化財資料館において実施した。

5 本書で用いた現地写真は各調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては、嘴託調査員 中東正之が行った。

6 本書の執筆は、第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章第1節を川村が、第Ⅲ章第2節・第3節を水久保がそれぞれ担当した。編集は川村が行った。

7 調査および本書作成にあたっては嘴託調査員 高村勇士・富田卓見、調査補助員 川西宏実・川畑康雄・中川夕香・宮西貴史が従事した。

8 本調査に係る記録類や出土遺物は、茨木市立文化財資料館〔〒567-0861 大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号 電話（072）634-3433〕において保管している。広く活用されることを希望する。

9 現地調査、報告書の作成にあたっては以下の諸機関・諸氏より、様々なご協力・ご指導を賜った。記して感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。

茨木市立豊川小学校・河本純一・木村まり・社会福祉法人 慶徳会

凡　　例

- 1 本書に記載された測量成果については、世界測地系（測地成果2000）に基づいている。図中のX・Y座標は国土座標第VI系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示している。
- 2 標高は東京湾平均海面（T.P.+）値で示した。単位は全てmである。
- 3 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行（1/25,000地形図）を拡大、縮小、加筆して使用したものである。
- 4 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定したものである。地層観察用畦の観察面はシートで被覆するなどして、湿った状態を保つように留意した。また、地層の粒度の記載に関しては、地質学で標準的に用いられるWentworthの粒径区分を使用した。なお、同一地層内に異なる粒径の粒度が幅をもって認められる場合には、基本的に細粒の粒径を先にして、「シルト～粗砂」のように記載した。ただし、場合によっては主体を占めるものを後にして「極粗砂混じりシルト」のように記載したものもある。
- 5 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、瓦器はアミ掛け、それ以外のものは白抜きで示した。
- 6 遺物観察表の法量記載における（ ）は推定復元値、△は残存値を示す。
- 7 本書における遺構、遺物の時期決定は以下の文献を主な参考としている。
平安学園考古学クラブ 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』
古代の土器研究会編 1992 『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』
古代の土器研究会編 1993 『古代の土器Ⅱ 都城の土器集成Ⅱ』
古代の土器研究会編 1994 『古代の土器Ⅲ 都城の土器集成Ⅲ』
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

目 次

序文

例言・凡例・目次

第Ⅰ章 調査の経緯 1

第Ⅱ章 位置と環境 3

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 94-2 区の調査 5

第2節 15-1 区の調査 11

第3節 まとめ 28

遺物観察表 33

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図 1 調査区位置図

図 2 宿久庄西遺跡調査区位置図

図 3 茨木市地質図

図 4 茨木市遺跡分布図

図 5 94-2区遺構平面図

図 6 94-2区包含層出土土器実測図1

図 7 94-2区包含層出土土器実測図2

図 8 94-2区遺構出土土器実測図

図 9 15-1区遺構平面図

図10 15-1区南壁土層断面図

図11 15-1区包含層出土土器実測図

図12 15-1区SB1平・断面図

図13 15-1区 SB2平・断面及び出土土器実測図

図14 15-1区 SB3平・断面図

図15 15-1区 SI1平・断面及び出土土器実測図

図16 15-1区 SI2平・断面図

図17 15-1区 SK2平・断面及び出土土器実測図

図18 15-1区 SK4平・断面及び出土土器実測図

図19 15-1区 SX2平・断面及び出土土器実測図

図20 15-1区 SX3平・断面及び出土土器実測図

図21 15-1区 SP89平・断面及び出土土器実測図

図22 15-1区 SP96平・断面及び出土土器実測図

図23 建物遺構分布図

表目次

表1 94-2区出土遺物観察表（1）

表2 94-2区出土遺物観察表（2）

表3 94-2区出土遺物観察表（3）

表4 94-2・15-1区出土遺物観察表

表5 15-1区出土遺物観察表（1）

表6 15-1区出土遺物観察表（2）

写真図版目次

PL1	1. 94-2区 調査区東半部（西から） 2. 94-2区 調査区南半部（北から）	PL10	1. 15-1区 SX2南北畔断面（西から） 2. 15-1区 SX2南北畔断面（西から） 3. 15-1区 SX2南北畔断面（西から） 4. 15-1区 SX2東西畔断面（南から） 5. 15-1区 SX2東西畔断面（南から）
PL2	1. 15-1区 A区全景（南から） 2. 15-1区 B区全景（南から）	PL11	1. 15-1区 SX3全景（西から） 2. 15-1区 SX3南北畔断面（東から） 3. 15-1区 SX3南北畔断面（東から） 4. 15-1区 SX3東西畔断面（北から） 5. 15-1区 SX3東西畔断面（北から）
PL3	1. 15-1区 A区南壁断面（北西から） 2. 15-1区 B区南壁断面（北東から）	PL12	1. 94-2区 包含層出土土器
PL4	1. 15-1区 SB1・2全景（南から） 2. 15-1区 SP1断面（南から） 3. 15-1区 SP7断面（南から） 4. 15-1区 SP3断面（南から） 5. 15-1区 SP8断面（南から）	PL13	1. 94-2区 包含層出土土器
PL5	1. 15-1区 SB3全景（北から） 2. 15-1区 SP61断面（北から） 3. 15-1区 SP63断面（北から） 4. 15-1区 SP65断面（北から） 5. 15-1区 SP66断面（北から）	PL14	1. 94-2区 包含層出土土器
PL6	1. 15-1区 SI1全景（南から） 2. 15-1区 SI1北壁断面（南から） 3. 15-1区 SI1畔断面（東から） 4. 15-1区 SI1土器出土状況（南東から） 5. 15-1区 SI1土器出土状況（西から）	PL15	1. 94-2区 包含層出土土器
PL7	1. 15-1区 SI2全景（北から） 2. 15-1区 SI2東壁断面（西から）	PL16	1. 94-2区 包含層出土土器 2. 94-2区 SP6出土土器 3. 94-2区 SP6出土土器 4. 94-2区 SP10出土土器 5. 94-2区 SP42出土土器
PL8	1. 15-1区 SK2検出・土器出土状況（西から） 2. 15-1区 SK2完掘状況（南から） 3. 15-1区 SK2南北畔断面（西から） 4. 15-1区 SK2南北畔断面（西から） 5. 15-1区 SK2東西畔断面（北から）	PL17	1. 94-2区 SP43出土土器 2. 94-2区 SP43出土土器 3. 94-2区 SP46出土土器 4. 94-2区 SP75出土土器 5. 94-2区 SP11・44・45・46・58・75出土土器
PL9	1. 15-1区 SK4東西畔断面（南から） 2. 15-1区 SK4東西畔断面（南から） 3. 15-1区 SK4東西畔断面（南から） 4. 15-1区 SK4南北畔断面（西から） 5. 15-1区 SK4土器出土状況（南から）	PL18	1. 15-1区 包含層出土土器
		PL19	1. 15-1区 包含層出土土器 2. 15-1区 包含層出土土器
		PL20	1. 15-1区 SB2、SI 1、SK2・4、SX2出土土器
		PL21	1. 15-1区 SX2・3、SP96出土土器
		PL22	1. 15-1区 SX3出土土器 2. 15-1区 SI 1、SK4、SX2、SP89・96出土土器

第Ⅰ章 調査の経緯

1. 調査の経緯

ここで報告するのは茨木市清水1丁目地内における2件の調査である(94-2区、15-1区)。当地は宿久庄西遺跡の範囲にあり、既往の調査より古代の集落跡が検出されることが予想された。確認調査の結果、遺構・遺物が確認できたことから本調査を実施することになった。本調査の実施は94-2区が平成7年1月9日～3月31日、15-1区は平成27年5月11日～6月12日である。両調査区は同一敷地内にあり、約10mの間隔をおいている。

94-2区に関しては、20年以上前の調査体制のもとで実施されたものであり、長らく未報告のままであった。今回の整理作業にあたり確認できたものは、平面図1枚とコンテナ5箱分の遺物のみにとどまった。こういった経緯ではあるものの、15-1区とは同一敷地内の調査でもあることから、ここに併せて報告するものである。

2. 周辺の調査

宿久庄西遺跡では、上記以外にも本市教育委員会による調査が2件、(財)大阪府文化財センターによる調査が平成12年より3次にわたって実施されている〔(財)大阪府文化財センター2002〕。本市教育委員会の調査は当報告分の調査区から約100m南東方向の同一敷地内にある。平成6年調査と(図2-1)、平成24年調査である(図2-4)。この2件は現在、報告書作成に向けて整理中である。

(財)大阪府文化財センターによる調査区は当調査区の北西に位置する(図2-3)。この調査により宿久庄西遺跡の範囲はより北側にまでひろがることになった。

この調査では奈良時代から鎌倉時代の掘立柱建物や、井戸、土坑などの遺構が検出されている。調査区の北端で接する箕面市庄田遺跡〔(財)大阪府文化財センター1999〕とは一連の遺跡と考えられ、勝尾寺川流域の段丘上が居住地、および耕作地として利用されていたことが窺える。

出土遺物には円面硯、製塙土器をはじめ、鉄滓や輪の羽口といった鍛冶関連があり、単なる農村集落ではなかった可能性が指摘される。平安時代以降になると、遺構・遺物は量的に少くなり、散在的な様相を呈するようになる。居住地が小規模となり、時期によって移動したと考えられる状況が窺える。室町時代以降では、遺構・遺物はほとんど検出されなくなり、耕地化がさらに進み、現在に至る集落域を形成していくと考えられる。

この報告にあるように既往の調査からは宿久庄西遺跡において、人々の活動が最も活発化したのは奈良時代であったといえよう。その内容としては一般集落ではなく、公的な施設、もしくは官人や有力氏族の居住地であった可能性が高いことが指摘されている。



図1 調査区位置図



図2 宿久庄西遺跡調査区位置図

第Ⅱ章 位置と環境

1. 地理的環境

宿久庄西遺跡は市域の西端にあり箕面市との市境近くに位置する。遺跡より北部は標高300m前後の北摂山地と、そこから派生する丘陵部からなる。市内の主要河川の一つである勝尾寺川は、こういった北摂山地を源流とし東流しながら河岸段丘を形成する。

当遺跡はこうした丘陵部に面し、大きく蛇行する勝尾寺川によって形成された河岸段丘上に立地している。勝尾寺川の対岸には、弥生時代後期から中世まで続く複合遺跡である宿久庄遺跡がひろがる。また、遺跡の南方には西国街道（旧山陽道）が東西に通り、この地が古来より重要な交通路であったことが窺える。

市域の南部は安威川、元茨木川などの主要河川によって形成された冲積層の三島平野がひろがる。銅鐸鑄型が出土したことで、一躍注目をあつめた東奈良遺跡はじめとする市内遺跡の多くはこの三島平野に分布している。



図3 茨木市地質図

2. 歷史的環境

勝尾寺川流域における宿久庄西遺跡周辺の遺跡分布は、古くは旧石器時代から人間の活動痕跡を認めることができるものの、三島平野に分布する各遺跡に比べてそれほど濃密とはいえない。既往の調査からは、この地の開発が進むのは奈良時代に入ってからとされている。

奈良時代の茨木市域は摂津国岬下郡に属しており、新屋・宿人（久）・安威・穂積の4郷があったとされ、宿久庄西遺跡周辺は、宿人（久）郷に属していたと考えられる。奈良時代の遺構が検出される遺跡には、箕面市粟生間谷・庄田遺跡、茨木市宿久庄西・宿久庄遺跡がある。庄田遺跡では製塙土器、硯、墨書き土器といった一般集落とは異なる遺物が出土し、その北西に位置する箕面市粟生間谷遺跡では、ガラス製の玉を納めた奈良三彩壺を埋納した埴輪遺構が検出している。

以上のように勝尾寺川流域に分布する宿久庄西遺跡周辺の各遺跡は、単なる農村集落ではなく公的な施設、もしくは有力氏族の居住地として利用されていた可能性が指摘されている。

また文献史料では、鎌倉時代初頭に編纂された『神宮雜例集 卷一』に宿久庄の記述を見る事ができる。天平十二年（740年）に大中臣清万呂が根津国嶋下郡壽久郷に籠居し、春日神社を寿久山御社に還して、近くに住んでこれを奉ったと伝える。寿久は宿久のこと、寿久山御社は当地に所在する武内須久神社とされる。しかし天平十二年当時、中臣清万呂の籠居は確認できること、奈良春日神社の創始がこの時期より後のことなど、その所伝を疑問とする説があり定かではない〔茨木市史編さん委員会2003〕。



図4 茨木市遺跡分布図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 94-2 区の調査

1. はじめに

当調査区（94-2 区）は第2節で報告する 15-1 区の 10m 南側に位置する。第1章で述べたように当区は平面図 1 枚と、コンテナ 5 箱分の遺物を確認できるのみであった。ここで報告する内容は十分と言えるものではないが、同一敷地内である 15-1 区の調査と併せて遺跡の理解をより深めたいと考える。

2. 遺構（図 5、PL1）

調査区は南東側が張り出した「L」字状を呈する。東西 43m、南北 19m（張り出し部 26m）、調査面積は 1,157m² である。そのほぼ全域にわたって 378 基を数えるビットが検出された。

ビットは直徑 0.3m 程度の円形のものと、直徑 0.6 ~ 0.8m 程度の不整円形のものがある。他に直径 1m 前後で隅丸方形を呈するものがある。これらのうち複数のビットが軸をもって並ぶことから、掘立柱建物跡を構成する遺構と考えられる。平面図上で復元した 5 棟分（SB1 ~ 5）を以下に示す（図 5）。

SB 1 調査区東側に位置する。規模は 3 間（4.5m）× 2 間（3.3m）、東西軸方向は E – 18° – N、ビット芯々距離は 1.4 ~ 1.5m である。柱掘方は不整円形で、その規模は長軸 0.8 ~ 1.1m、短軸 0.5 ~ 0.9m を測る。

SB 2 調査区中央北端に位置する。規模は 2 間（2.5m）× 1 間（1.7m）以上、東西軸方向は E – 2° – N、ビット芯々距離は 1.4 ~ 1.5m である。柱掘方は隅丸方形で、その規模は長軸 0.9 ~ 1.2m、短軸 0.7 ~ 0.9m を測る。

SB 3 調査区中央に位置する。規模は 3 間（8.2m）× 1 間（3.9m）、南北軸方向は N – 4° – W、ビット芯々距離は 2.6 ~ 3.9m である。柱掘方は隅丸方形で、その規模は長軸 1 ~ 1.4m、短軸 0.6 ~ 1.2m を測る。

SB 4 調査区西側に位置する。規模は 3 間（5.2m）× 2 間（4.8m）、南北軸方向は N – 6° – W、ビット芯々距離は 1.9 ~ 2.3m である。柱掘方は隅丸方形で、その規模は長軸 0.8 ~ 1.3m、短軸 0.5 ~ 1m を測る。

SB 5 調査区西側南端に位置する。規模は 3 間（5.9m）× 3 間（4.5m）の総柱建物で、南北軸方向は N – 2° – E、ビット芯々距離は 1.5 ~ 1.8m である。柱掘方は隅丸方形、不整円形で、その規模は長軸 0.7 ~ 1.0m、短軸 0.6 ~ 0.8m を測る。

この他に調査区西側に土坑と考えられる遺構が 4 基あり、その規模は長軸 1.6 ~ 3.3m、短軸 1.3 ~ 2m を測る。遺物の出土はなく、これら遺構の性格は不明である。

3. 出土遺物

出土遺物は包含層とビットのみであり 68 点を図化した。



図5 94-2区 遺構平面図

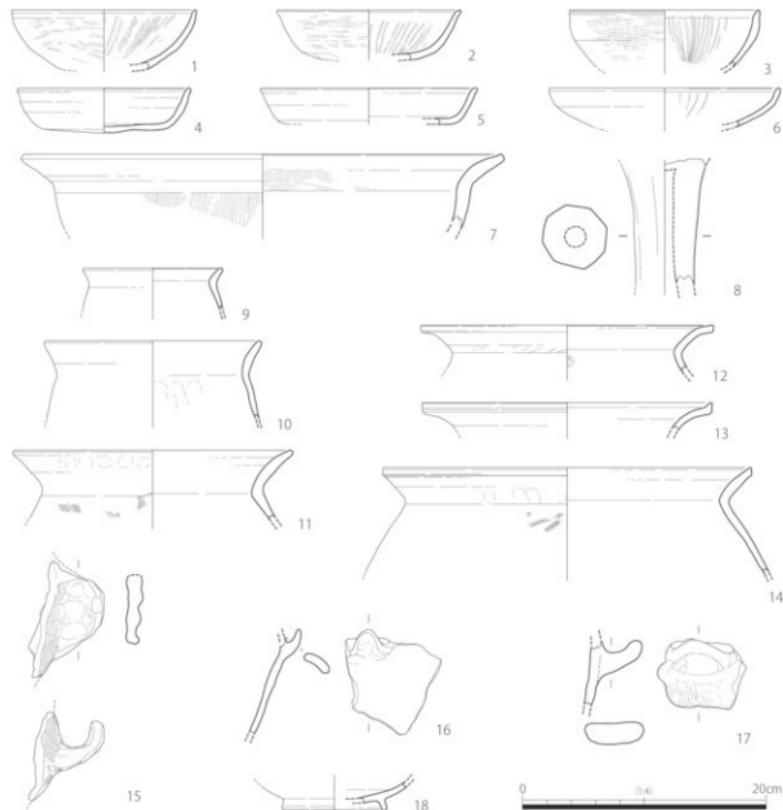


図6 94-2区 包含層出土土器実測図1

包含層出土遺物（図6・7、PL12～16）

1～3は土師器杯Cで、口径は14.8～15.4cmを測る。いずれも丸みのある底部からなだらかに口縁部にいたる。調整は外面にヘラミガキ、2は底部にヘラケズリが確認できる。内面には放射状暗文を施す。1・2は飛鳥III期、3はやや古く飛鳥I期頃であろうか。

4・5は土師器杯Aである。ともに平らな底部から直線的に口縁部がのびる。平城京III期か。

6は土師器高杯で口径は18.6cmを測る。杯部は浅い。口縁端部は内傾し僅かに凹む。内面には放射状暗文を施す。口縁部は外反し、端部は面をなす。

7は口径39cmを測る鍋である。体部外面には粗い縦方向のハケ調整、口縁内面に横方向のハケ調整を施す。口縁部は外反し、端部は面をなす。

8は高杯脚部である。外面は面取りによって八角形を呈する。

9は小型の土師器壺である。短い口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。

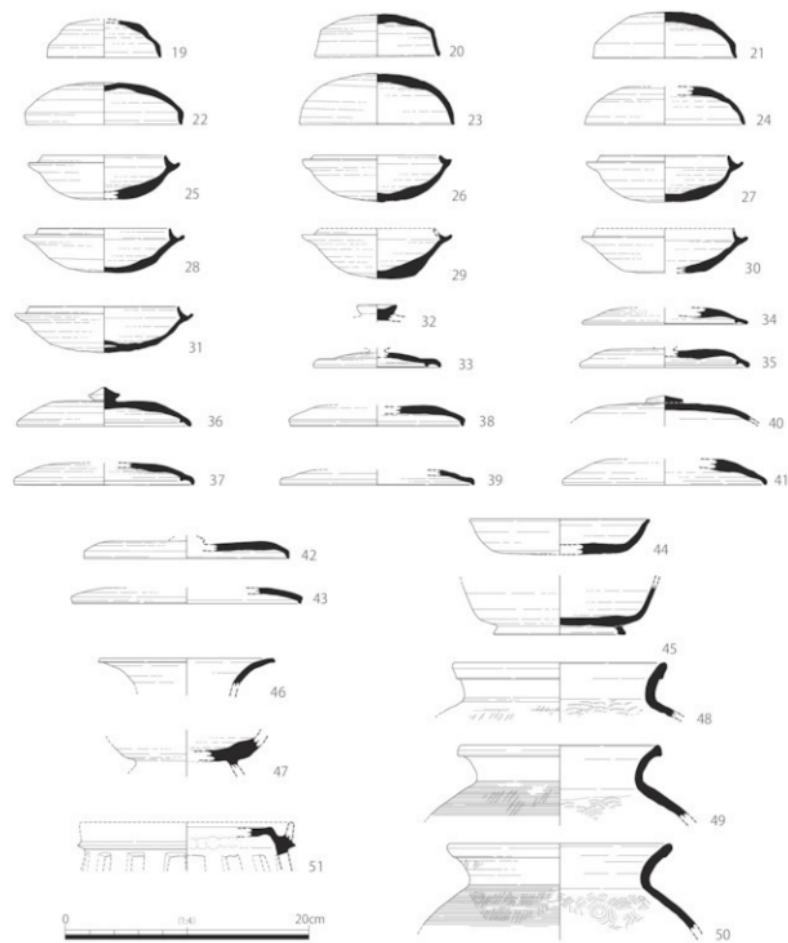


図7 94-2区 包含層出土土器実測図2

10～14は土師器底である。10は口縁端部を丸くおさめる。11～14は口縁端部を上方につまみあげる。調整は内外面をナデ、11・14の外面には縦方向のハケ調整が認められる。奈良時代の所産と考えられる。

15～17は土師質の把手である。いずれも平面形は三角形状で、薄く仕上げているもの（15・16）と厚手のもの（17）がある。鍋、もしくは櫃であろう。

18は陶器碗である。内外面ともに淡いオリーブかかった灰色の釉を施すが、高台の内側と見込みは露胎である。高台の断面形状は四角で、焼成は堅緻であるが時期は不明である。

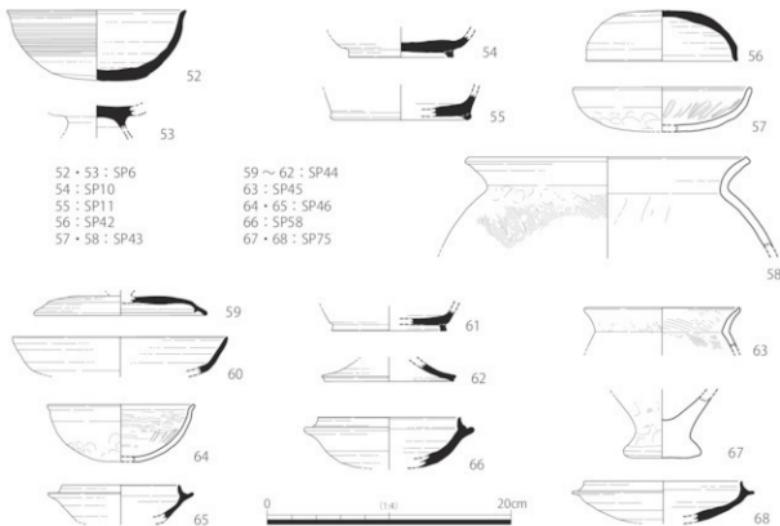


図8 94-2区 遺構出土土器実測図

19～24は須恵器杯H蓋である。口径が10cmまでの小型のもの（19・20）と、10～13cmまでのもの（21～24）がある。口縁部と天井部との境の稜は見られない。口縁部は直下に下るもの（19・21・22）、「ハ」の字形に開くもの（20）があり、その端部はいずれも丸くおさめるものである。調整は天井部約半分の範囲に回転ヘラケズリを施すが、19の天井部のみ未調整である。

25～31は須恵器杯H身である。25～29の口径は10cm台である。31はやや大きく12.2cmを測るが、器高は4cmまでにおさまる。いずれも立ち上がりは短く内傾し、端部は丸くおさめる。底部は丸くなるもの（25～28・31）と、小さな平底をなすもの（29・30）があり、いずれも底部の約半分以上に回転ヘラケズリを施す。以上の杯Hは飛鳥I～II期に比定できるであろう。

32は須恵器高杯蓋である。中央が凹むつまみ部分である。直径3.3cmを測る。

33～43は須恵器杯B蓋である。33は口径が10.3cmと小さく、杯G蓋とすべきかもしれない。34～37はかえりをもち、口径は13.3～13.6cmを測る。内面のかえりはきわめて短く、形態化の様相を示している。36は天井部には宝珠形つまみをもつ。38～43はかえりをもたず、口径は14.1～19.0cmを測る。口縁端部が垂下し小さな面をなすもの（38・39・42）、丸くおさめるもの（41）、わずかに内傾させるもの（43）がある。40の天井部の宝珠形つまみは扁平である。

44は杯Aである。底部は平らで厚みをもち、口縁部は上方にのびる。

45は杯Bである。高台は「ハ」の字形に開き、接地面は平らである。

46は大きく外反する口縁部をもつ。長頸壺であろう。

47は器壁が厚く、台付壺、ないしは台付鉢になるものと考えられる。

48～50は口径16.1～18cmを測る壺である。いずれも口縁部は短く外反する。口縁端部を折り曲げて突帯状を呈するもの（48・50）と、肥厚して丸くおさめるもの（49）がある。外面は平行タキ

その後、カキ目を施す。内面には同心円状タタキが認められる。

51は硯面が残存する團足円面硯である。海・縁部と透孔上部が僅かに残る。陸と海との区別は明瞭で硯面部の径は14cmに復元した。透孔は幅1.8cmの方形で、14方向に穿たれていたと考えられる。類似資料が陶邑古窯跡TG70・15号にあり〔大阪府教委1977〕、時期は飛鳥IV期、7世紀末～8世紀である。当資料もこの時期に比定できようか。

遺構出土遺物（図8、PL16・17）

17点を図示した。すべて掘立柱建物跡と考える遺構（SP）出土であるが、照合する資料を確認することができなかつたため、前述のSB1～5とは対応できない。

SP6からは須恵器2点を図示した。52は口径14.7cm、器高5.8cmを測る、深さのある身である。丸みのある体部外面にカキ目、底部に回転ヘラケズリを施す。底部は厚みがあり、口縁端部は内傾する。焼成はあまく、全体に灰白色を呈する。あるいは上下を逆にして壺の蓋とすべきものかもしれない。53は高杯であろう。脚部の器壁は薄く、それに対して底部は厚みをもっている。全体に回転ヨコナデを施す。

SP10出土の54は須恵器の台付壺になるものであろう。断面台形の貼り付け高台をもつ。

SP11出土の55は須恵器碗Bと考えられる。「ハ」の字形に短くひろがる高台をもつ。8世紀末頃か。

SP42出土の56は須恵器杯H蓋である。口縁部と天井部の境の稜は認められない。口縁部は直下し、端部は丸くおさめる。天井部の約半分以上に回転ヘラケズリを施す。焼成はあまく、土師器のような灰黄色を呈する。

SP43からは2点の土師器を図示した。57は杯Cである。小さな平底から斜め上方にひらく口縁部からなる。内面には放射状暗文を施し、外面口縁部下半および底部には指頭圧痕を残す。飛鳥IV～V期であろう。58は口縁部が短く外反する壺である。外面に粗いタテハケを施す。

SP44からは4点の須恵器を図示した。59は杯B蓋である。内面のかえりはごく薄く短くなっている。60は平らな底部から口縁部が斜め上方にひらく皿である。端部は薄くつまみ出す。61は杯Bである。短い高台部の接地面は平坦である。62は高杯の脚裾部である。

SP45出土の63は口径12.6cmを測る小型の土師器壺である。口縁部は短く外反し、端部は上方につまみ上げる。

SP46出土の64は土師器杯Cである。内面はヘラミガキの後、放射状暗文を施す。65は須恵器杯H身である。受部、立ち上がりは短く薄い。ともに飛鳥I～II期と考える。

SP58出土の66は須恵器杯H身である。全体に厚手である。

SP75出土の67は厚みのある底部から斜め上方にひらく体部をもつ。胎土は粗く、ハケの後にナデ調整を施す。台付鉢であろう。68は須恵器杯H身である。受部、立ち上がりとともに短く薄い。外面の底部の半分以上に回転ヘラケズリを施す。

4.まとめ

包含層ならびに遺構出土遺物が示す年代は主に7世紀～8世紀である。奈良時代の細かな年代比定は難しいが、8世紀前半におさまるものと考えて大過ないであろう。当調査区で検出された掘立柱建物の年代も7世紀～8世紀前半を中心とすると考えられる。中でも特筆すべきは円面硯の出土であり、これら建物の性格を考える上で一つの鍵となるものである。

第2節 15-1 区の調査

1. 調査に至る経緯と経過

宿久庄西遺跡は茨木市の西端、箕面市との市境に位置しており、北摂山地から派生する丘陵の東側に面し、勝尾寺川によって形成された河岸段丘上に立地する。遺跡は国道 171 号線沿いを南端として東西約 400 m、南北約 300 m をその範囲としていたが、都市計画道路茨木箕面丘陵線建設に先立って、平成 12 年から平成 14 年にかけて（財）大阪府文化財センターによって実施された発掘調査により、遺跡の範囲がさらに広がることが判明した。それにより現在は、線路沿いに大阪モノレール豊川駅から北へ約 700 m の範囲までが周知の埋蔵文化財包蔵地として指定されている。

今回の調査地は、遺跡の中央部分からやや南東寄りに位置する。当該地において福祉施設の建設計画が持ち上がり、文化財保護法第 93 条に基づく発掘届が提出され、平成 27 年 4 月 14 日に茨木市教育委員会が事前確認調査を実施した。確認調査は、建物建設予定地の東端と西端にそれぞれ 2 m × 2 m のトレンチを設定して行った。その結果、東側のトレンチでは、現況から -70cm、西側のトレンチでは -35cm の深度において遺構を検出し、遺物の出土も確認した。それにより、開発者と協議を行った結果、破壊が免れないことから、建物建設予定地において本発掘調査を実施することとなった。調査面積は 225m² であり、現地調査は平成 27 年 5 月 11 日～6 月 12 日まで行った。

2. 調査の方法

調査に着手する前に、その事前準備として、調査区全域の現代盛土を重機によって掘削し、搬出を行った。調査は敷地内に廃土置き場の確保が出来ないため、調査区を 2 分して行い、便宜上、先に調査した西半分を A 区、後に調査した東半分を B 区と呼称した。遺構番号は、調査区にかかわらず遺構の種類ごとに 1 からの通し番号を付与し、番号の前に遺構種類を表記した。ただし、掘立柱建物や竪穴建物など、個々の遺構が組み合って一つの遺構を構成するものについては、別途、単独遺構とは別に通し番号を付与し、表記した。遺構記号については、『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘調査編一』（文化庁文化財部記念物課監修 2010）に準拠している。

調査は平成 27 年 5 月 11 日から A 区の機械掘削を開始し、地山面上で遺構検出を行った。5 月 22 日に完掘状況の全景写真を撮影して A 区の調査を終了し、埋め戻した。A 区の埋戻し終了後、5 月 25 日に B 区の機械掘削を開始し、A 区同様、地山面上で遺構検出を行った。全景写真は施設責任者の許可を得て、調査区の南側に隣接する福祉施設建物 3 階のベランダから撮影を行った。なお、B 区の調査期間中、5 月 28 日と 29 日に、近隣に所在する茨木市立豊川小学校の 3 年生と 5 年生を対象に、現地の見学や包含層の掘削体験など、実際の発掘作業を体验してもらう機会を設けた。また、6 月 2 日には、敷地内にある福祉施設の職員および施設利用者を対象とした現地見学会を実施した。6 月 10 日に B 区の完掘状況の全景写真を撮影し、6 月 12 日に全ての現地調査を終了した。

3. 基本層序（図 10、PL.3）

層序は、調査区の西半と東半とでは耕作土や包含層の残存状況で異なる部分があるが、基本的には上から盛土層（第 1 層）、旧耕作土層（第 2 層）、遺物包含層（第 3 層）、地山層（第 4 層）となっている。

現地表から -0.3 ～ -0.8 m までが盛土で、盛土層の一部にはコンクリートが残存する。その下に第 2



図9 15-1区 遺構平面図

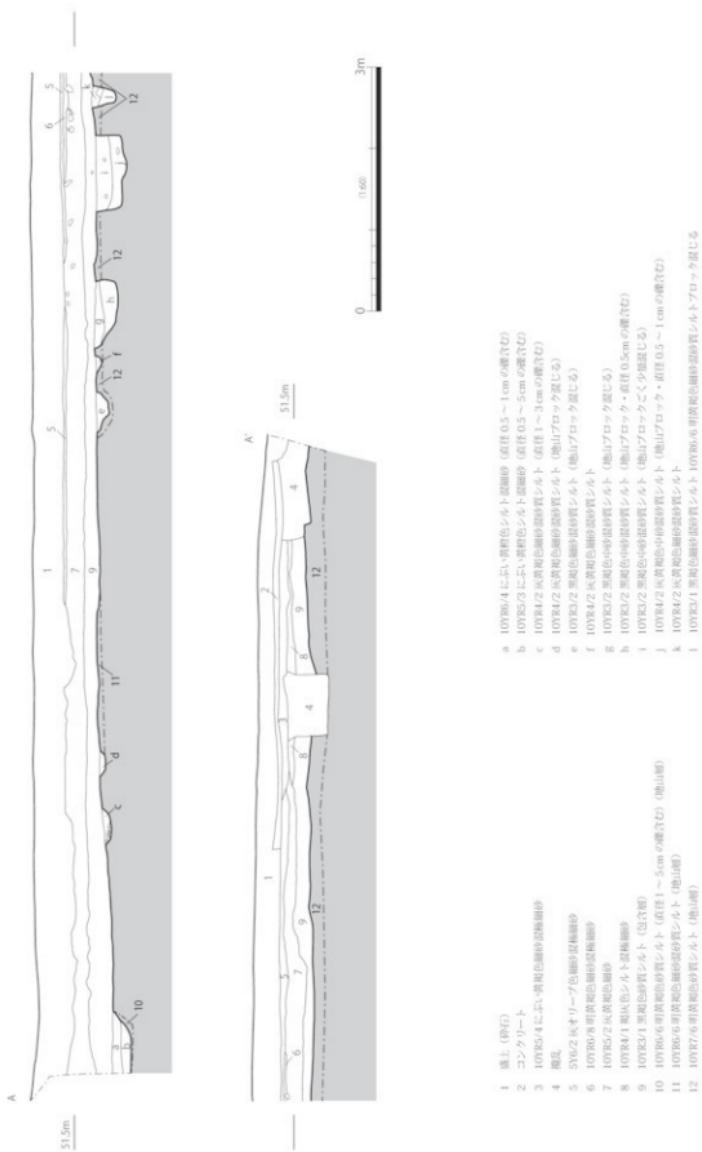


図 10 15-1 区 南壁土層断面図

層が確認された。耕作土は調査区全域に分布しており、層理面があることから2～3層に細分可能であるが、これを一括した。第2層全体の層厚は、0.1～0.34mである。第3層は、層厚0.05～0.4mで、土質の差異により上下に分けることができる。下層の黒褐色層（図10 土色番号9）は、層厚0.06～0.18mで、調査区全域で認められた。上層の褐灰色層（図15 土色番号4、図16 土色番号6）は、層厚0.14～0.3mで、調査区の東壁から北壁にかけて、竪穴建物を検出した周辺でのみ認められた。上層については、耕作土の影響を受けた部分が母材となる層と明瞭に区別できたものとみられる。このため、本来的には第2層に含めるべきであろう。第3層中には飛鳥時代～奈良時代の遺物が含まれている。包含層を除去すると明黄褐色砂質シルトの地山層が露出し、その上面で遺構検出を行った。

調査地周辺の地形は北から南へ下る緩やかな傾斜がみられ、また、調査地を中心として東西に下がっていく状況にある。遺構検出面のレベルはT.P.+51.0m～T.P.+51.3mで、調査区の南東部分で地山面が低くなり、落ち込み状の堆積が認められた。なお、地山層には一部に1～5cm程度の大きさの礫を多く含む部分が認められ、主として調査区の北西部と南東部分にみられた。

4. 遺構と遺物

調査区全域で掘立柱建物、竪穴建物、ピット、土坑など多数の遺構を検出した（図9）。

包含層出土遺物（図11、PL.18・19）

先述したとおり、包含層は上下2層に細分できるが現地調査では遺物は取り分けておらず、包含層出土遺物として一括して取り扱う。

69～74は土師器である。69・70は杯C。ともに口縁部内外面にヨコナデ、内面に放射状暗文、底部外面にナデを施す。69はやや丸味を帯びた底部と斜め上にひらく口縁部をもつ。口縁端部は内傾する。70は口縁端部が短く外へ屈曲し、体部内面にもヨコナデを施す。71・72は甕。71は口縁部が強く外反し、端部は外側に面をもつ。口縁部内面は横位のハケ調整、口縁部外面および体部内面はナデ、体部外面は斜位のハケ調整を施す。72は全体的に磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、口縁部内面にかすかに横位のハケ調整が確認できる。口縁端部は丸くおさめる。73は器種不明の土師質の把手。全体に指頭圧痕が確認できる。断面形状は扁平な橢円形である。74は羽釜。口縁部は「く」の字形に外反する。全体的に磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、内面にはナデと指頭圧痕が認められる。また、外面上には鈸と体部の接合痕が残る。摂津A型〔菅原1988〕とみられる。

75～89は須恵器である。75は杯H蓋。76は杯H身。口径の残存率は約1/2で、復元径10.9cm、器高3.0cmを測る。法量や形態からみて飛鳥I期とみられる。77は杯G身。小型で器高が高い形態から、飛鳥I期に比定できる。78は杯A。79・80は杯B蓋。79はかえりは形骸化しているが、つまみは明瞭な宝珠形を呈している。80は頂部が平坦で、口縁端部は垂下する。79・80はともに飛鳥V期に比定できる。81は杯。82～86は杯B。それぞれの高台端面の形態は、82と85は水平、83は外傾、84と86は内傾する。87は短脚の高杯脚部。残存率が悪いため、透孔の有無は不明である。88は壺の体部、89は台付壺の底部、90は甕の口縁部である。

以上の包含層出土遺物の時期は、飛鳥時代から奈良時代の範疇に収まるものとみられる。

掘立柱建物

掘立柱建物は3棟検出した。いずれも調査区外へ続いており、その一部のみを検出した。

S B 1（図12、PL.4） 調査区北西部で検出した側柱建物である。検出した規模は、桁行2間（3.25

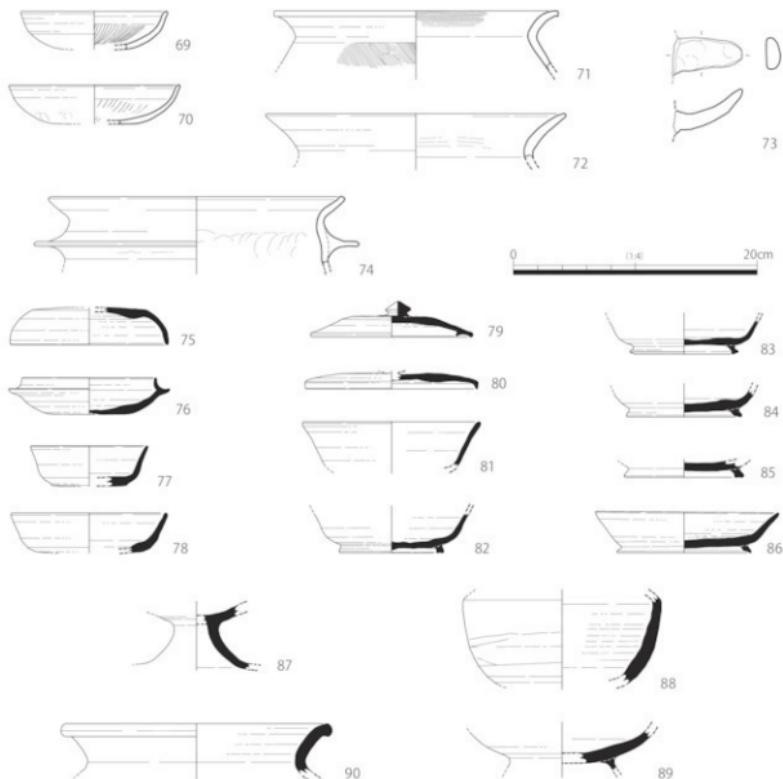
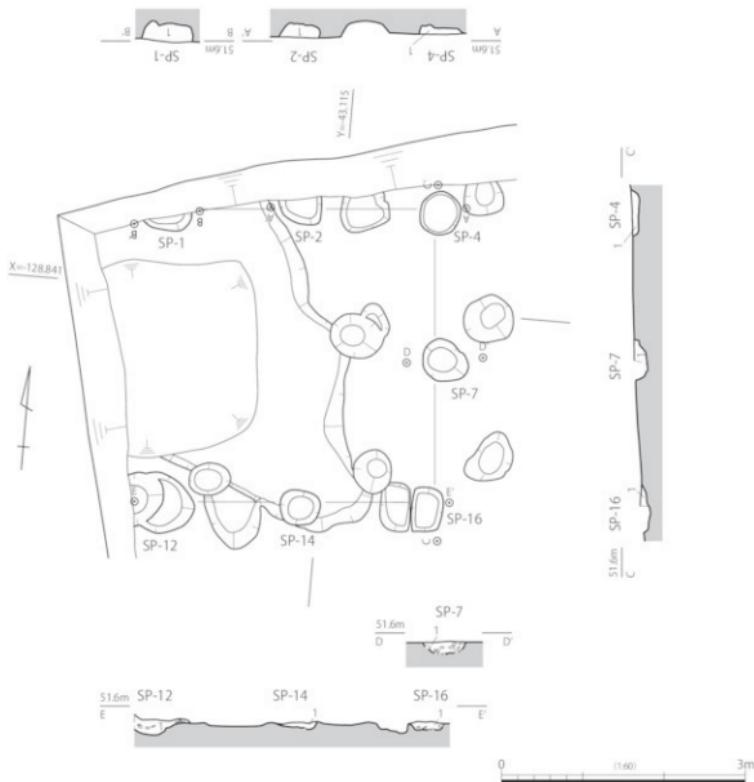


図11 15-1区 包含層出土土器実測図

m)以上、梁行2間(3.6m)で、調査区の西側へと延びる。東西軸方向はE-5°-N。建物を構成する柱穴の平面形は、円形から隅丸方形など様々で齊一性に欠ける。断面形は浅い皿形または隅丸の台形状を呈する。柱穴の規模は、長軸0.5m~0.6m、短軸0.42m~0.53m、深さ0.02~0.19mを測る。SP12のみ平面形が長軸0.87m以上、短軸0.75mと他のものと比較して大きい。柱穴の埋土は、含有する礫に若干の差異があるものの、基本的にはいずれの柱穴も黒褐色細砂混砂質シルトの単層である。

遺構内からは土師器と須恵器の細片が出土したのみで、建物の明確な時期を示すことは困難である。

SB2(図13、PL4・20) 調査区北西部で検出した総柱建物である。検出した規模は、東西2間(3.0m)、南北2間(3.25m)であるが、さらに北側へ延び、東西2間×南北2間以上の建物になる可能性も考えられる。南北軸方向はN-9°-W。建物を構成する柱穴の平面形は、円形ないし不整円形、断面形は「U」字状または隅丸の台形状を呈する。柱穴の規模は、長軸0.47~0.74m、短軸0.4~0.61m、深さ0.07~0.42mを測る。柱穴の埋土は基本的には黒褐色細砂混砂質シルトであり、SB1の埋



- SP-1 1 10YR3/1 黒褐色細砂質シルト (直径 0.5～5cm の礫含む)
 SP-2 1 10YR3/1 黑褐色細砂質シルト (直径 3cm の礫含む)
 SP-4 1 10YR3/1 黑褐色細砂質シルト (直径 1～3cm の礫含む)
 SP-7 1 10YR3/1 黑褐色細砂質シルト (直径 5～10cm の礫含む)
 SP-12 1 10YR3/1 黒褐色細砂質シルト (直径 0.5～5cm の礫含む)
 SP-14 1 10YR3/1 黑褐色細砂質シルトと 10YR7/6 混合 黑褐色細砂質シルト
 (地山ブロック)
 SP-16 1 10YR3/1 黑褐色細砂質シルト (地山ブロック混じる)
 (直径 0.5～5cm の礫含む)

図 12 15-1 区 SB1 平・断面図

土と近似している。

遺物は SP3 から須恵器杯 G が 1 点出土している。91 は口径の残存率は約 1/4 で、復元径は 9.7cm、器高 3.3cm を測る。平坦な底部と斜め上にのびる口縁部からなる。口縁端部は丸くおさめる。飛鳥 II 期のものとみられる。

SB1 と SB2 については一部重複しているため、同時併存していたとは考えられないが、建物を構成する柱穴が切り合うことがなく、各々の詳細な時期が判断できる遺物の出土もみられないため、その前後関係を直接的に示す根拠は乏しい。しかしながら、東端の SP10 が SX2 を切っていることから、SX2 が SB2 より先行するのが分かる。なお、建物の南東角にあたる柱穴の欠落については、精査を重ねた

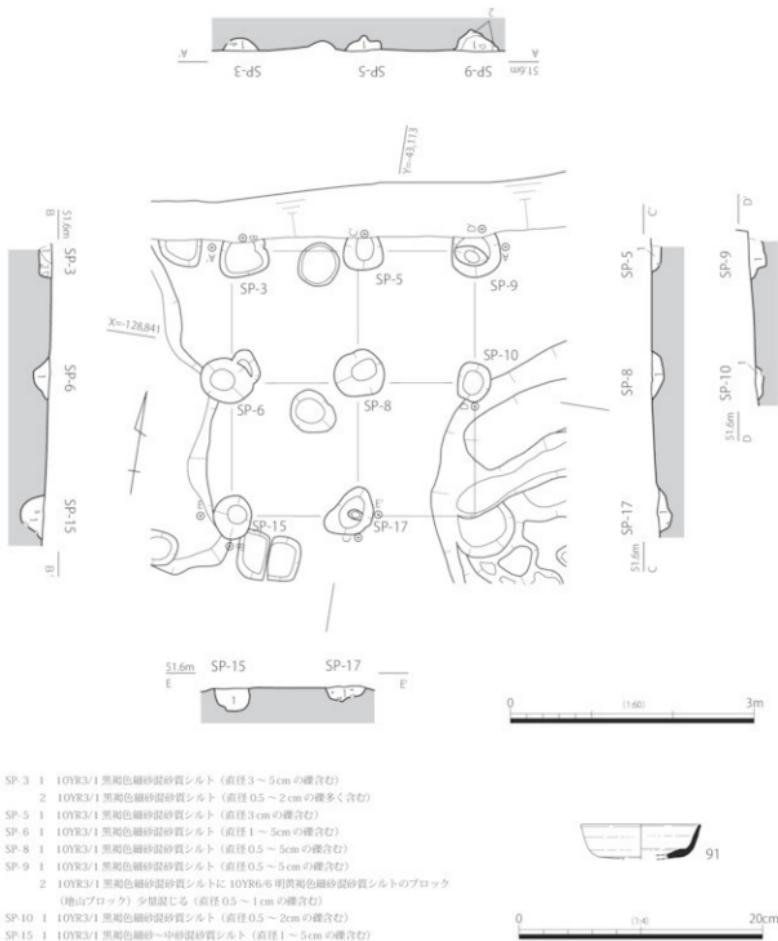
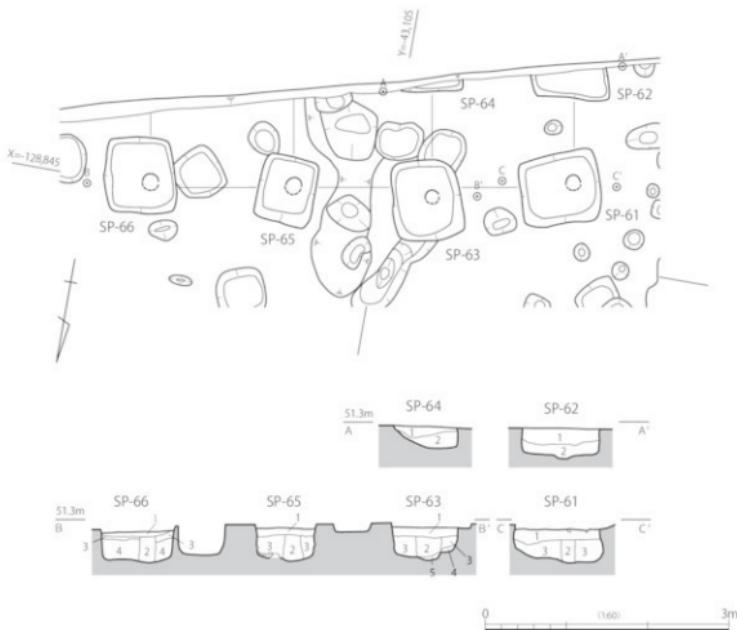


図13 15-1区 SB2 平・断面及び出土器実測図

が検出できず、見落とした可能性が僅かに残る。

S B 3 (図14、PL.5) 調査区南壁際で検出した総柱建物である。検出した規模は、東西3間(5.12m)、南北1間(1.4m)以上で、調査区の南側へ延びる。東西軸方向はE-10°-N。建物を構成する柱穴の平面形は隅丸方形、断面形は柱痕跡の部分で一段深くなる形状の不整形な隅丸長方形を呈する。柱穴の規模は、長軸0.78~1.04m、短軸0.72~0.89m、深さ0.3~0.41mを測る。各柱穴とも平面規模、断面の掘削深度に大差は認められず、ほぼ同様の規模である。北側柱列の芯々距離は、東より



- SP-61
 1 IOYR3/2 黒褐色細砂質シルト～繊維縫 10YR6/6 明黄色砂質シルトのブロック（以下、地山ブロック）混じる
 2 IOYR3/1 黒褐色中砂～粗砂質シルト 地山ブロック少量混じる
 3 IOYR3/2 黑褐色中砂～粗砂質砂質シルトと1地山ブロックの混合層（直径1～5cmの礫含む）
- SP-62
 1 IOYR3/1 黒褐色砂質層 地山ブロック少量混じる
 2 IOYR4/2 灰褐色細砂質シルト 地山ブロック多く混じる（直径0.5～1cmの礫含む）
- SP-63
 1 IOYR2/2 黑褐色細砂質シルト～繊維縫 地山ブロック混じる
 2 IOYR3/1 黑褐色中砂質シルト 地山ブロック混じる
 3 IOYR3/2 黑褐色中砂質砂質シルト 地山ブロック混じる
 4 IOYR3/2 黑褐色砂質シルトと10YR6/6 明黄色砂質シルト（地山ブロック）の混合層
 5 IOYR6/6 明黄色砂質シルト（地山層）と IOYR3/2 黑褐色砂質シルトのブロック混じる
- SP-64
 1 IOYR3/2 黑褐色細砂質シルト 地山ブロック混じる
 2 IOYR3/2 黑褐色中砂質砂質シルト 地山ブロック混じる（直径0.5cmの礫・炭粒含む）
- SP-65
 1 IOYR3/2 黑褐色細砂質シルト～繊維縫 地山ブロック混じる
 2 IOYR3/1 黑褐色中砂～粗砂質砂質シルト 地山ブロック混じる
 3 IOYR3/2 黑褐色中砂～粗砂質砂質シルトと地山ブロックの混合層（直径2～5cmの礫含む）
- SP-66
 1 IOYR3/1 黑褐色細砂質シルト～繊維縫 地山ブロック混じる
 2 IOYR3/2 黑褐色中砂～粗砂質砂質シルト 地山ブロック混じる
 3 IOYR3/2 黑褐色砂質シルト～繊維縫 地山ブロック混じる
 4 IOYR3/2 黑褐色中砂～粗砂質シルト 地山ブロック混じる

図 14 15-1 区 SB3 平・断面図

1.75 m、1.70 m、1.75 mを測る。

南壁際で検出した2基以外の全ての柱穴で柱痕跡が確認できた。それらは、周囲の埋土と比較して地山ブロックの混入が少なく、黒味が強い比較的均質な土層が堆積していることで識別できた。

遺物は土師器と須恵器の細片が出土しているのみで、時期が特定できるものや、図化できるものはなかった。そのため、建物の詳細な時期は不明である。

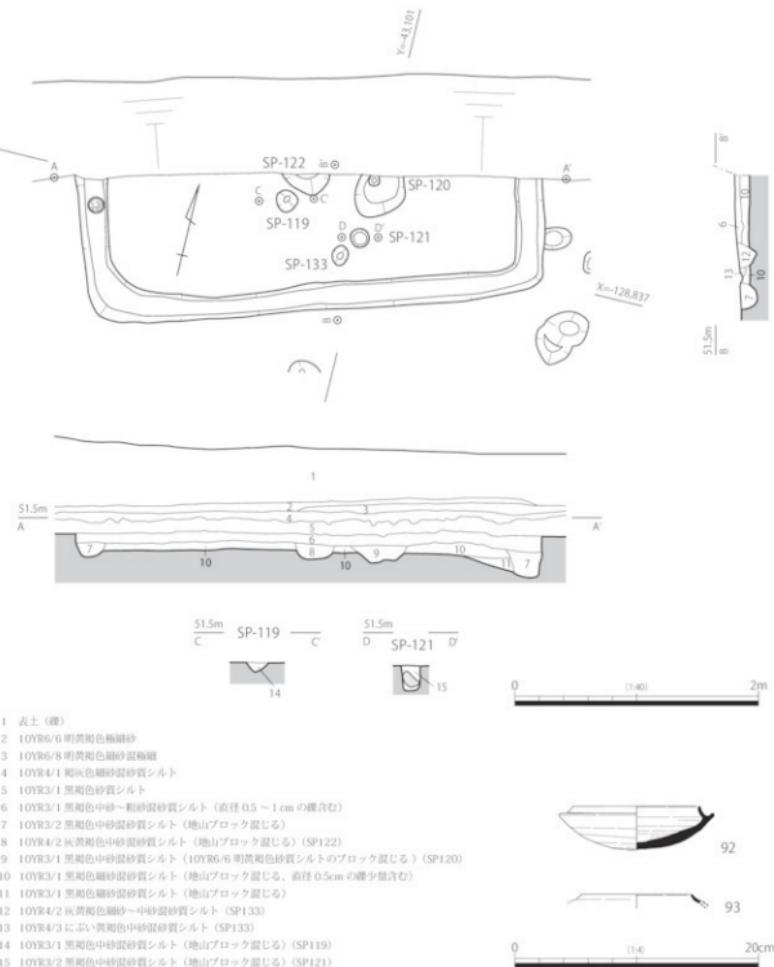


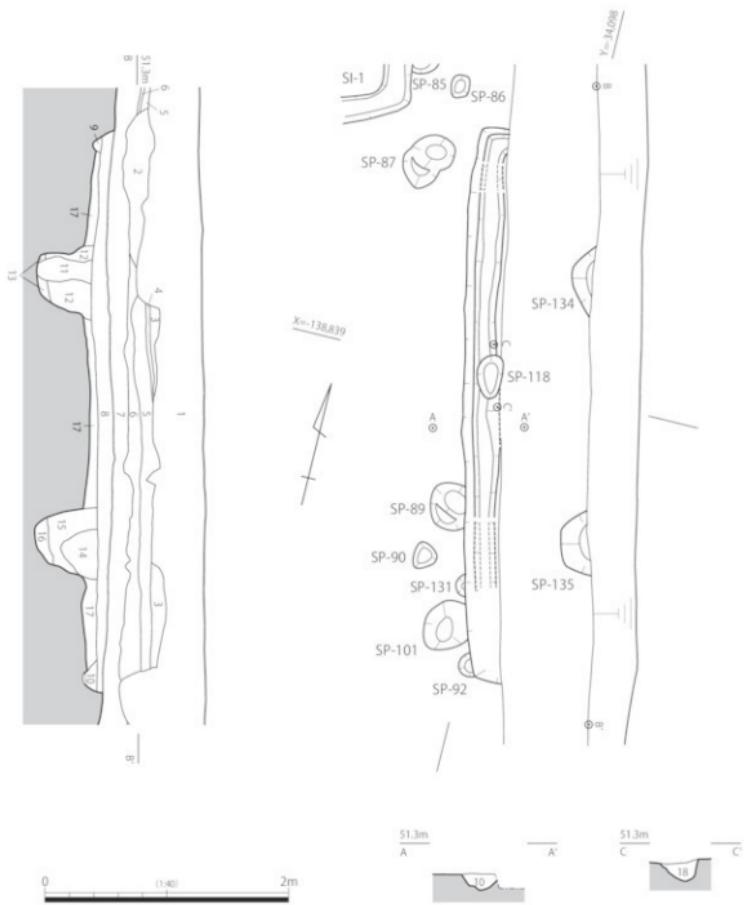
図 15 15-1 区 S11 平・断面及び出土器実測図

縫穴建物

縫穴建物は調査区北東端から東端にかけて 2 棟検出した。

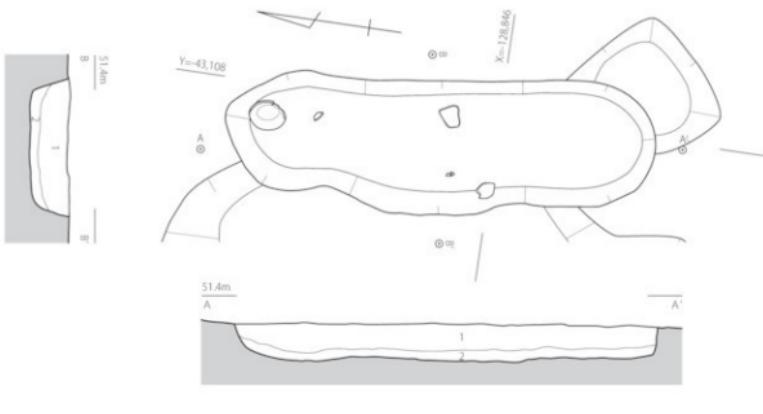
S11 (図 15、PL.6・20・22) 調査区北東部で検出した。検出した規模は、東西辺 3.75 m、南北辺 1.2 m 以上で、調査区の北側へと延びる。

建物は、地山ブロックが混じる黒褐色砂質シルトで貼床を施して床面を形成する。壁構の規模は、幅 0.18～0.25 m、深さ 0.11～0.19 m を測る。建物内ではピットを 5 基検出したが、主柱穴と思われ



- 1 表土（砂礫）
- 2 滲瓦
- 3 10YR5/2 黄褐色の中砂混砂質シルト
- 4 10YR6/6 明黄褐色細砂
- 5 10YR5/2 黄褐色細砂
- 6 10YR4/1 那灰色細砂混砂質シルト
- 7 10YR3/1 黑褐色砂質シルト
- 8 10YR3/1 黑褐色細砂混砂質シルト（直徑 0.5cm の礫含む）
- 9 10YR3/1 黑褐色細砂混砂質シルト（地山ブロック覆む）
- 10 10YR3/1 黑褐色中砂混砂質シルト
（地山ブロック・直徑 0.5 ~ 1cm の礫含む）
- 11 10YR3/1 黑褐色細砂～中砂混砂質シルト
- 12 10YR3/1 黑褐色中砂混砂質シルトと
10YR5/6 明黄褐色中砂混砂層（地山層）の混合層
- 13 10YR3/1 黑褐色シルト混砂層～中砂
- 14 10YR3/1 黄褐色中砂～粗砂混砂質シルト（直徑 1 ~ 3cm の礫含む）
- 15 10YR3/1 黑褐色中砂～粗砂混砂質シルト
(地山ブロック・直徑 0.5 ~ 1cm の礫含む)
- 16 10YR6/6 明黄褐色シルト混砂層～中砂（地山層）と
10YR3/1 黑褐色シルト混砂層～中砂（地山層）の混合層
- 17 10YR4/1 那灰色細砂混砂質シルト（地山層）と
10YR5/6 黄褐色細砂混砂層の混合層
- 18 10YR3/1 黑褐色細砂混砂質シルト
10YR6/6 明黄褐色シルト混砂層～中砂のブロック覆む

図 16 15-1 区 S12 平・断面図



1 10YR4/3 にい黄褐色中砂～極細砂質シルト（直径 0.5～1 cm の礫含む）

2 10YR4/3 にい黄褐色中砂～極細砂質シルト（地山ブロック混じる）

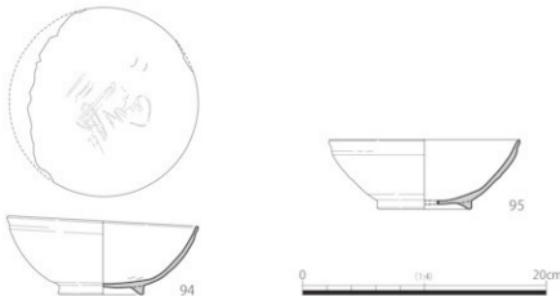


図 17 15-1 区 SK2 平・断面及び出土土器実測図

るものは確認できなかった。

主な出土遺物には図示した 2 点がある。92 は須恵器杯 H 身で、壁溝からほぼ完形の状態で出土した。口径 10.3cm、器高 3.6cm を測る。93 は須恵器短頸壺の口縁部。口縁部の残存率は約 1/5 で、復元径は 9.0cm を測る。器壁は 0.2cm と薄い。92 はその形態や法量から飛鳥 I 期のものとみられ、建物の時期の上限は当該期に位置付けられる。

S 12 (図 16, PL.7) 調査区東端で検出した。検出した規模は、東西辺 1.1 m 以上、南北辺 4.5 m で、調査区の東側へ延びる。調査時に掘削した側溝で削平してしまったため、実際に平面で検出できた規模は、東西辺で 0.25～0.32 m のみである。

建物は地山ブロックが混じる黄褐色細砂混シルトで床面を形成する。調査区東壁際で検出した SP134・135 は建物の西辺に対して平行に並んでおり、その位置から 4 本柱穴のうちの 2 基であると考えられる。SP134 の断面形は隅の丸い歪んだ逆台形、SP135 は断面「U」字状を呈する。いずれの柱穴においても、周囲の埋土と比較して、ブロック土の混入のない均質な黒褐色砂質シルトの埋土が認められる。

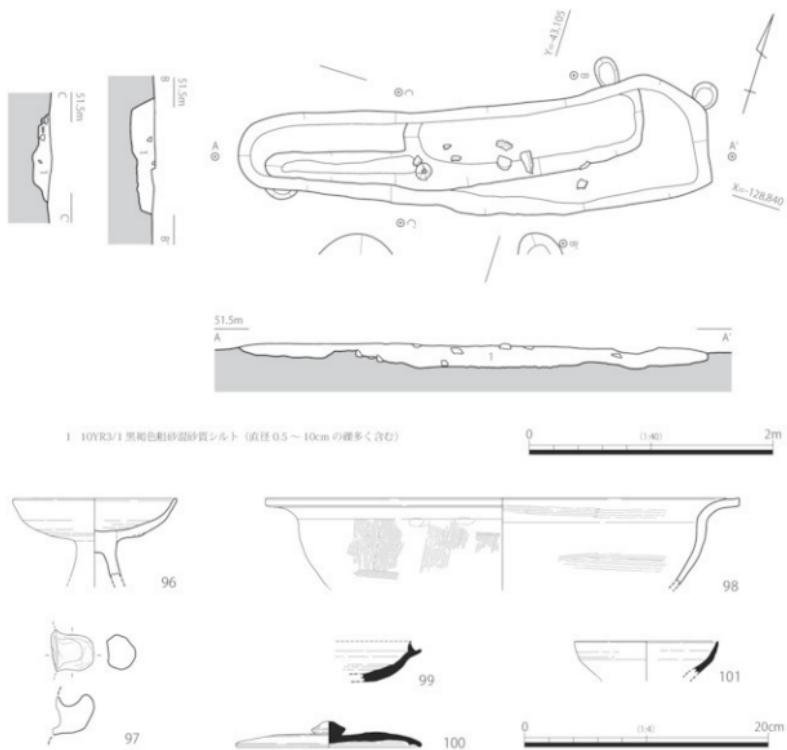


図 18 15-1 区 SK4 平・断面及び出土土器実測図

められ、これを柱痕跡と判断した。柱穴掘方と柱痕跡が貼床面上から切り込んでいた様子が確認できており、床面上から柱穴を掘削し柱を立てた可能性が考えられる。

建物土裏および柱穴のいずれからも遺物は出土しておらず、建物の時期については不明である。

土坑

土坑は 4 基確認した。そのうちの 2 基について報告する。

SK 2 (図 17、PL.8・20) 調査区の中央付近で検出した。平面形は細長い楕円形、断面形は丸い長方形を呈する。検出した規模は、長さ 1.75 m、幅 0.55 m、深さ 0.21 ~ 0.26 m を測る。主軸はほぼ南北を指向している。埋土は礫と地山ブロックの混入の状態で上下の 2 層に分層した。1 層にはぶい黄褐色中砂～粗砂混砂質シルトで、0.5 ~ 1 cm 程度の礫を含み、全体的に 2 層よりやや砂粒が粗い。2 層にはぶい黄褐色中砂～粗砂混砂質シルトで、地山ブロックを含んでいる。

遺物は土師器と須恵器の細片や瓦器が出土しており、そのうちの瓦器 2 点を図示した。94・95 とともに和泉型瓦器。94 は遺構の検出時にその北端部分において、ほぼ完形の状態で出土したものである。94・95 いずれも内外面ともに磨滅が著しいが、94 の見込み部分にかすかに暗文が認められる。

94は口径 15.55cm、器高 6.2cm、95は口径 15.45cm、器高 5.7cm を測る。94・95とともに体部が張り、外反しながら口縁部にいたる。また、高台は下方外側に踏ん張り、「ハ」の字状を呈する。以上のような器形から、和泉型 I～II期に相当すると思われるが、口縁部に強いヨコナデが施されていることや、調整が不明瞭ながらも外面に密なヘラミガキが施されているとは考えにくいくことから、II期前半、12世紀前半のものとみられる。

この遺構は、その形状などから土坑墓の可能性も考えられるが、断定し得る材料に欠けるため、可能性を示すだけに留めておきたい。

S K 4 (図 18、PL.9・20・22) 調査区の中央からやや北西寄りで検出した。平面形は不整形な隅丸長方形を呈し、遺構の底面は凹凸が激しく、断面形は不整形である。検出した規模は、長さ 3.84 m、幅 0.58 ~ 1.04 m、深さ 0.05 ~ 0.19 m を測る。埋土は 0.5 ~ 10cm 程度の礫を含む黒褐色粗砂混砂質シルトの単層である。

遺物は土師器と須恵器が出土している。96 ~ 98は土師器である。96は高杯。遺構の中央からやや西寄りで、天地逆の状態で出土した。脚部の内外面は磨滅が著しいが、杯部には内外面にヨコナデが確認できる。脚裾部は欠損している。97は器種不明の土師質の把手。全体がユビナデによって整形されており、体部との接合面には指頭圧痕が確認できる。98は鍋 A。口縁部の残存率は約 1/8 で、復元径は 38.7cm を測る。体部外面はハケ調整、内面はハケ調整およびナデを施す。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ調整およびナデを施す。8世紀前半～中頃か。

99 ~ 101は須恵器である。99は杯 H 身。残存状況が悪いため、口径の復元には至らなかった。口縁端部が欠損しているため、正確な立ち上がりの形状は不明であるが、おおよそ飛鳥 I 期のものとみられる。100は杯 B 盖。扁平な形態に形骸化したかえりが付く。かえりが消滅する直前の飛鳥 V 期のものとみられる。101は壺の口縁部。

その他

不明遺構として取り扱ったものは 3 基ある。そのうちの 2 基について報告する。

S X 2 (図 19、PL.10・20 ~ 22) 調査区の中央からやや東寄りで検出した。掘削の際に北へ大きく振りすぎたため、平面図に正確な形状をおさえられなかつたが、検出した平面形は不定形を呈する。検出した規模は、長軸 5.0 m、短軸 1.6 ~ 3.1 m、深さ 0.03 ~ 0.49 m を測る。

長軸方向の断面形は、浅い擂鉢状と北側の角度が急な浅い皿状が連続したような凹凸のある形状を呈し、南端部分の短軸方向の断面形は不整形な逆台形を呈する。遺構の底面全域に凹凸があり、平面形状の歪まと併せて全体として整然性に欠ける。埋土は 2 層に分けられ、1 層が黒褐色細砂混砂質シルト、2 層が黒褐色極粗砂混粘土質シルトである。下層のほうは上層より粘質が強く、地山ブロックの混入が多いことで識別した。また、下層からは須恵器片が多く出土した。遺構の性格については判然としないが、その形状が不整形で土師器や須恵器の破片が多く出土したことなどから、雑多に土器等が廃棄されたものと考えている。

遺物は土師器と須恵器が出土しており、そのうち 6 点を図示した。102は器種不明の土師質の把手。把手の先端は欠損しているが、平面三角形状になると思われる。体部外面はハケ調整、内面には指頭圧痕が確認できる。体部外面と把手の接合部にも指頭圧痕がみられる。

103 ~ 107は須恵器である。103は杯 H 身。口縁部の残存率は約 1/8 で、復元径 12.5cm を測る。その形態や法量から、飛鳥 I 期に位置付けられる。104は平瓶の口縁部。105 ~ 107は壺。107の口

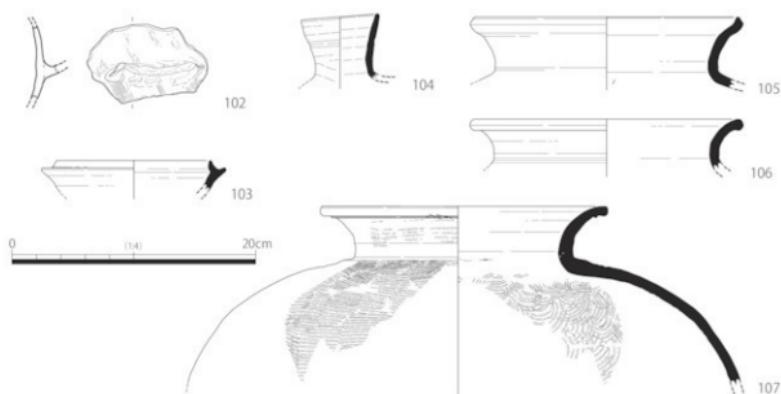
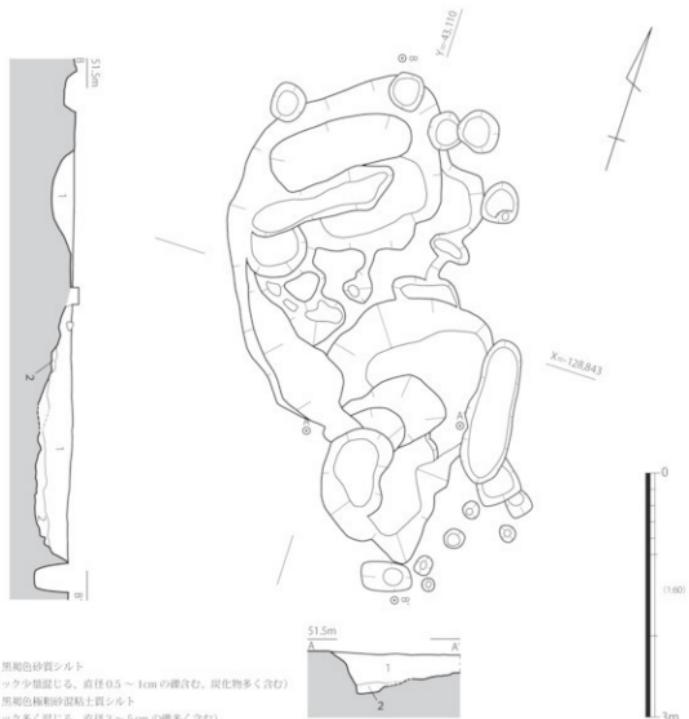


図19 15-1区 SX2 平・断面及び出土土器実測図

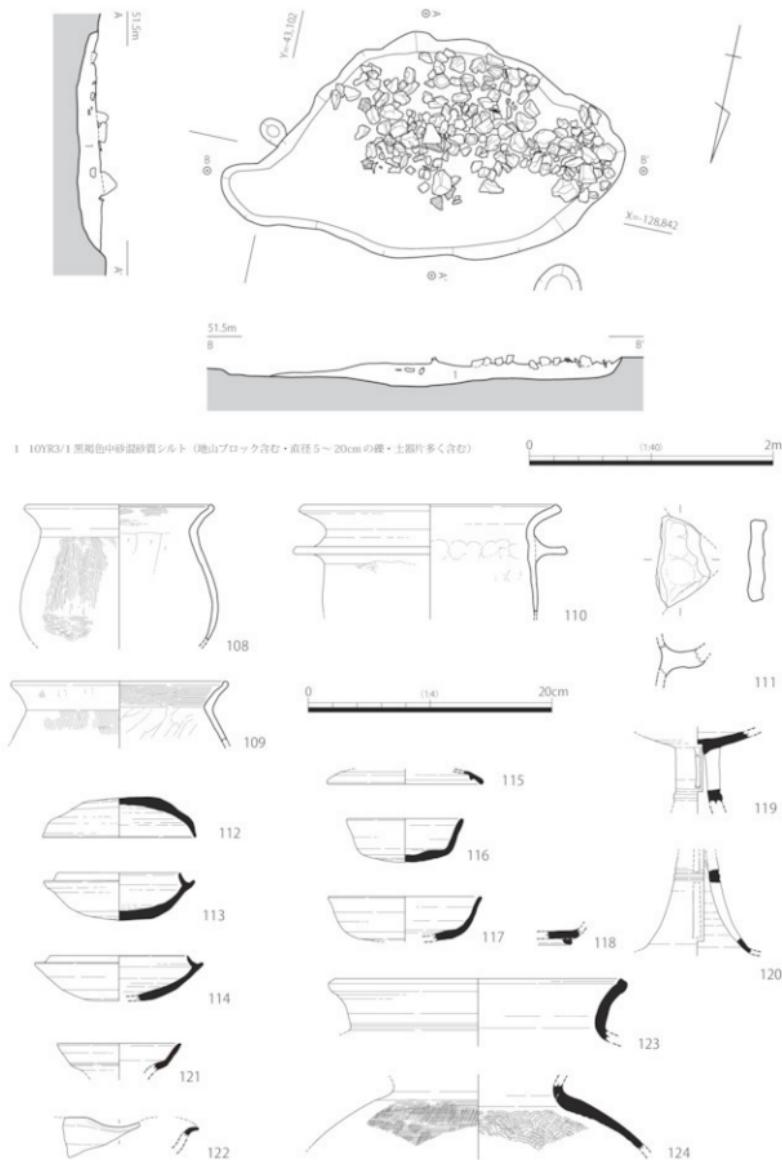


図 20 15-1 区 SX3 平・断面及び出土土器実測図

縁部外面は平行タタキの後ヨコナデが施され、口縁端部から口縁部内面にかけてはヨコナデで仕上げられている。体部外面は平行タタキ、内面には同心円状タタキが残る。

S X 3 (図 20、PL.11・21・22) 調査区の中央からやや東寄りで検出した。検出した平面形は不定形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は、長軸 3.3 m、短軸 1.82 m、深さ 0.13 ~ 0.21 m を測る。埋土は地山ブロックを含む黒褐色中砂混砂質シルトの単層で、拳大の礫や土器片を多く含む。

遺物は土師器と須恵器が出土した。108 ~ 111 は土師器である。108・109 は甕。ともに口縁部はわずかに内彎し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面および体部外面はハケ調整、体部内面はヘラケズリを施す。108 は体部最大径が下半にあり、体部から緩やかに口頸部に続く。口縁部外面にはヨコナデを施す。

109 は口縁部外面にわずかにハケの痕跡が確認でき、ハケ調整の後ナデによって仕上げられていることが分かる。110 は羽釜。長胴の体部で口縁部は「く」の字状に強く外反し、口縁端部は外側に面をもつ。口縁部内面から外面にかけてはナデ調整であるが、内面の一部にはハケ調整が残る。体部内面はユビオサエの後ナデによって仕上げられている。体部外面は磨滅が著しく調整は不明瞭である。また、体部外面には鶴との接合痕が残る。摂津 A 型とみられる [菅原 1983]。111 は器種不明の土師質の把手。把手の先端部分は欠損しているが、平面形は三角形状、断面形は扁平な板状を呈するものである。内外面ともに強いユビナデによって整形される。

112 ~ 124 は須恵器である。112 は杯 H 盖。口縁部の残存率は約 2/3 で、復元径 12.4cm、器高 3.3cm を測る。113・114 は杯 H 身。113 の口縁部の残存率は約 2/3 で、復元径 10.0cm、器高 3.9cm を測る。114 の口縁部の残存率は約 1/12 で、復元径 11.25cm、器高 3.7cm を測る。113 と 114 は、その形態と法量から飛鳥 I 期に相当するとみられる。115 は杯 B 盖。かえりは形骸化しており、飛鳥 IV 期のものか。116 は杯 G。口縁部の残存率は約 3/8 で、復元径 9.25cm、器高 3.6cm を測る。117 は杯 A。口縁部の残存率は約 1/8 で、復元径は 12.25cm を測る。118 は杯 B。残存率が悪く、径の復元には至らなかった。底部内面は回転ナデ、高台は貼り付け高台である。119・120 は長脚二段の高杯で、ともに長方形の透孔を二方向にもつ。121 は飴の口縁部。斜め上方にひらく口縁部で、途中で屈曲してわずかに段をもつ。内外面ともにヨコナデ、口縁端部は丸く仕上げる。122 は残存状況が悪いが、片口鉢の口縁部と思われる。外面はヨコナデ、内面はナデおよびヨコナデが施され、口縁端部は丸くおさめる。123・124 は甕。124 は体部外面は平行タタキの後、横位のカキ目を施し、体部内面には同心円状タタキが残る。

ピット

建物を構成するもの以外で、図化可能な遺物が出土したピットについて報告する。

S P 89 (図 21、PL.22) 調査区の東端、SI2 に隣接して検出した。検出した規模は、東西 0.29 m 以上、

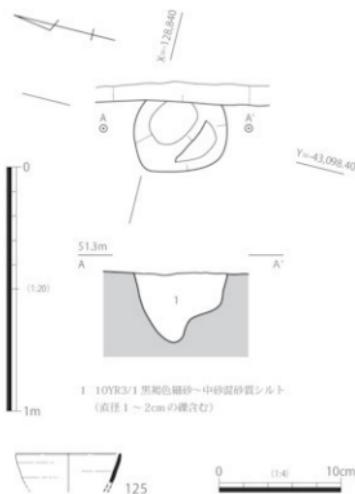


図 21 15-1 区 SP89 平・断面及び出土土器実測図

南北 0.39 m、深さ 0.19 ~ 0.28 m を測る。東端部分が SI2 によって削平されているため全形は不明であるが、平面不整円形を呈するとみられる。断面形は一部を段状に掘削した形状をしている。埋土は黒褐色細砂～中砂混砂質シルトの単層で、一見して SI2 の埋土と近似しており、SI2 とそれほどの時期差なく埋没したのではないかと思われる。

遺物は土師器と須恵器が出土しており、そのうちの 1 点を図示した。125 は須恵器の口縁部。口縁部の残存率は約 1/5 で、復元径は 8.45cm を測る。内外面ともに回転ナデによって整形され、口縁端部は丸くおさめる。壺の口縁部か。

S P 96 (図 22, PL.21・22) 調査区の東端で検出した。検出した平面形は、径 0.34 ~ 0.37 m の円形を呈する。深さは 0.10 ~ 0.13 m で、断面形は底面に凹凸のある皿形を呈する。埋土はブロック土や礫を少量含む黒褐色細砂～粗砂混砂質シルトの単層である。

出土遺物には図示した 2 点がある。126 は土師器皿 A。平らな底部から斜め上にひらく口縁部からなる。図 22 15-1 区 S P 96 平・断面及び出土土器実測図 口縁端部は内側に肥厚する。全体的に磨滅しており調整は不明瞭であるが、底部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデが確認できる。127 は須恵器杯 A。底部内面および口縁部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリを施す。平安京 I 期中頃と思われる。

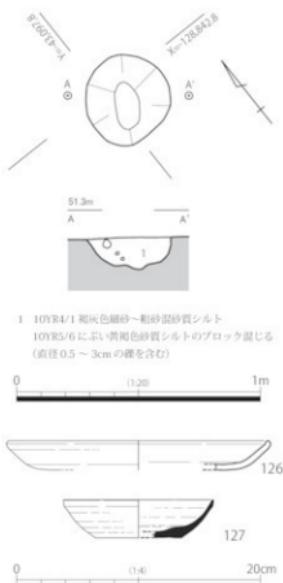


図 22 15-1 区 S P 96 平・断面及び出土土器実測図
10YR4/1 黄灰色細砂～粗砂混砂質シルト
10YR5/6 に赤い黄褐色細砂質シルトのブロック混じる
(直径 0.5 ~ 3cm の礫を含む)

第3節 まとめ

94-2区では掘立柱建物（SB）5棟、ピット（SP）378基、土坑（SK）4基が検出された。また15-1区では、調査区全域から、掘立柱建物（SB）3棟、竪穴建物（SD）2棟をはじめピット（SP）124基、土坑（SK）4基、溝（SD）1条、不明遺構（SX）が3基と、多くの遺構を検出した。個別の遺構の時期については、15-1区で検出した多くの遺構では時期を特定できる遺物が得られなかつたため、本文中で述べたように帰属時期が判然としないものが多い。さらに94-2区については、個別遺構の時期については不明と言わざるを得ない。しかしながら、94-2区で遺構出土とされている遺物は、飛鳥時代から奈良時代の範疇におさまることから、検出された掘立柱建物も当該期に属するものと想定される。また15-1区で出土した遺物についても飛鳥時代から奈良時代が中心で、古墳時代後期を遡るものはない。以上のことから、調査地周辺においては、飛鳥時代前半頃に集落が営まれ始めるものと推定できる。

上述したように94-2区については、遺構と出土遺物を照合できないため、その詳細や変遷を検討するのは難しい。また15-1区の個別の遺構の時期については、その判断ができる遺物の出土がないものや、点数がごく僅かの遺構が大多数である。その少数をもって時期を決定付けるのはいさか危険であるとは思われるが、検討材料となり得るのが15-1区の成果のみであるため、調査のまとめとして現時点での参考として、その時期が想定できるものを中心に、15-1区での遺構の変遷について簡単にみていきたい。

飛鳥時代前半

15-1区での最も古い段階は、飛鳥時代前半となる。遺構の重複関係から、まず、SX2が形成され、ほどなくして、そのSX2を切る形で柱穴が掘削されSB2が建てられる。SB2から出土した須恵器杯Aは、飛鳥II期に比定される。SB2と重複して存在しているSB1との時期差や前後関係については、SB1から遺物の出土がなく、柱穴の重複関係もないため、不明と言わざるを得ない。しかし、SB1とSB2としては柱穴の規模や埋土に大きな差異は認められないことから、狭い時期幅の中で建て替えられた可能性が考えられる。また、SB3についてもその時期は不明である。

なお、竪穴建物については、SI1から飛鳥I期とみられる須恵器杯Hが出土している。SI1とSB1やSB2との同時性や前後関係などの詳細については、時期が判断できる遺物が極めて少数であるなかで結論付けることはためらわれる。SI2については、直接時期を判断できるものではないが、近接して検出したSI1と建物の方向軸がほぼ同じであること、床面の形成状況や埋土を比較しても大差が認められないことなどから、同時期ないしは近接した時期のものと思われる。なお、SI1については、出土遺物からその所属時期は飛鳥時代初頭と考えられるが、当該期の近畿地域は、竪穴建物から掘立柱建物への移行が一般的とされる時期であり、その存在については建物の機能差も含め注視される。他に、大阪府下での飛鳥時代に属する竪穴建物の検出例としては、茨木市總持寺遺跡〔(財)大阪府文化財センター2004〕、枚方市九頭神遺跡〔(財)枚方市文化財研究調査会1994・2004、枚方市教育委員会1988・1993・1997〕、寝屋川市高宮遺跡〔寝屋川市教育委員会1986〕、藤井寺市はざみ山遺跡〔(財)大阪府文化財センター2005〕、貝塚市秦庵寺・麻生中下代遺跡〔大阪府教育委員会1997〕などがある。15-1区での検出により、貴重な事例が追加されることとなった。

ただ、15-1 区では検出された竪穴建物が、94-2 区からは 1 棟も確認されていない。15-1 区でも調査区の北東端でその一部を検出したのみであるので、その状況から鑑みると、竪穴建物は 15-1 区より北東方向へ展開する可能性の他、94-2 区では後世の削平により、その存在が不明となった可能性がある。

飛鳥時代後半～奈良時代

飛鳥時代後半に入ると SX3 が、飛鳥時代末から奈良時代前半から中頃に SK4 が形成される。それぞれの遺構の性格は不明であり、また、当該期に伴う建物は調査区内にはみられない。

平安時代以降

平安時代には、SP96において、平安京 I 期中の須恵器杯 A の出土がみられる。

15-1 区における最終段階として、12 世紀前半に SK2 が形成される。その性格としては、土坑墓が想定されるが明確ではない。

以上、15-1 区の成果について概観してきた。遺構の出土遺物を見る限りでは、飛鳥時代を中心であり、平安時代以降の遺構もごく僅かしか確認されなかった。調査面積等の制約は考えられるが、奈良時代以降、遺構の分布が希薄になる可能性は考えられる。

次に、周辺で行われた既往の調査成果についてみていくことで、宿久庄西遺跡の集落の展開について考えてみたい。

(財) 大阪府文化財センター調査区（センター平成 14 年調査）

94-2・15-1 区より北西へ 150～500 m の地点において、(財) 大阪府文化財センターによって行われた調査では、奈良時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている（以下、センター調査区）。しかし、平安時代以降、その数量および分布範囲は急速に狭まる傾向にあり、奈良時代が最も人々の活動が活発であったとされている。図 23 に 15-1・94-2 区およびセンター調査区で検出された建物跡を図示した。センター調査区では、建物 31・54・90・100・195・502・512・515 が奈良時代、建物 18・34・117・271 が平安時代に属する掘立柱建物として確認されている。センター調査区と 94-2・15-1 区で得られた成果とでは、集落が営まれ始める時期が奈良時代と飛鳥時代と、時期差が認められる。

なお、遺跡の性格としては、縁釉陶器や円面鏡などが出土し、規模の大きい建物（図 23 建物 502）もみられるものの、掘立柱建物の柱間に共通した尺などが見られず建物規模に統一性がなく、そのほとんどが小規模な建物であること、石帶や帶金具などの物証となる遺物の出土が見られず、墨書き土器の出土量も少ないことなどから、公的施設とするには積極的な物証に欠けるとして、ここで確認された建物群は、有力氏族の居住域であった可能性が指摘されている〔(財) 大阪府文化財センター 2002〕。

11-1 区（茨木市教育委員会平成 24 年調査）

94-2・15-1 区より約 100 m 南東において茨木市教育委員会が平成 24 年に発掘調査を実施している。現在整理中であり未報告ではあるが参考として取り上げておく（以下、11-1 区）。その成果については、日々、報告書を刊行する予定であり、詳細については省略するが、簡単に調査成果を述べると、古墳時代後期の竪穴建物をはじめとして、古墳時代末から奈良時代にかけての溝や土坑、また、中世の土坑な

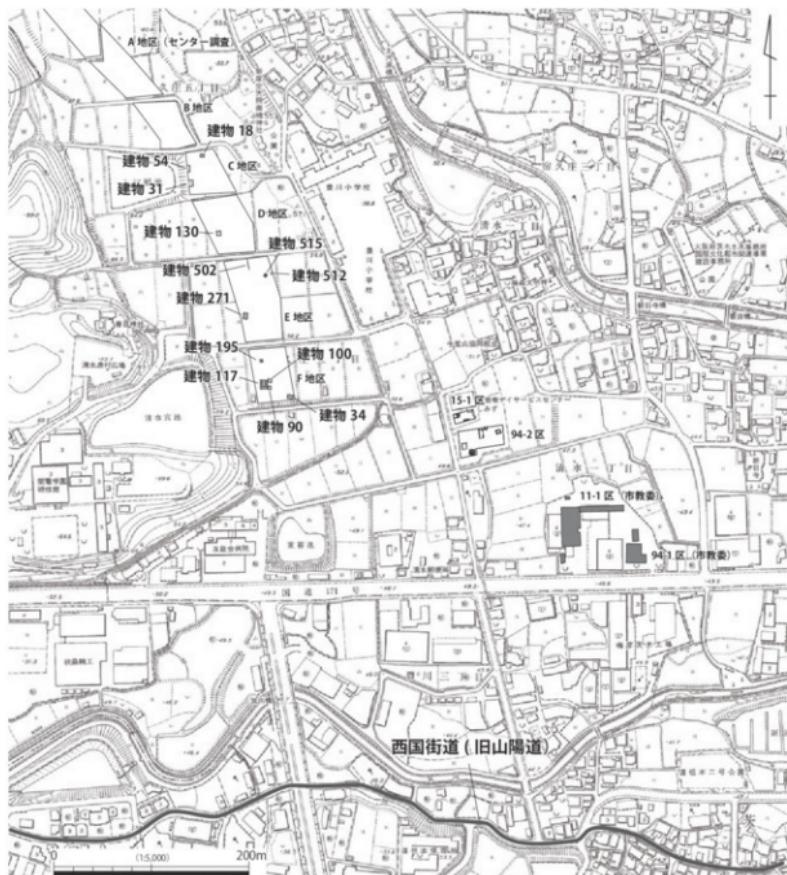


図23 建物遺構分布図

などが検出されている。94-2・15-1区でみられた須恵器が古くても飛鳥I期の所産であったに対し、竪穴建物出土の須恵器はそれを若干遡る可能性が高い。詳細については近刊の報告書を参考されたい。

以上のように現在確認されている中で、宿久庄西遺跡において最も古い遺構が認められるのは、茨木市教育委員会によって調査が行われた11-1区で、古墳時代後期頃に該当する。次いで、94-2・15-1区で古墳時代末から飛鳥時代の遺構が認められ、その後、センター調査区において奈良時代を中心として集落が営まれる。遺跡の南部地域では古墳時代後期から飛鳥時代に集落が形成され始めるに対し、遺跡の北西部地域では古墳時代および飛鳥時代に該当する遺構はみられず、奈良時代がその始まりとなっている。これらの様相から、宿久庄西遺跡における集落の萌芽期は遺跡の南部地域にあり、時期を

追うごとに北西方向へ展開していく傾向がみてとれる。また、南部地域では奈良時代の遺構も確認されているものの、人々の活動が最も活発であったのは飛鳥時代とみられるのに対して、北西部地域では奈良時代にその中心がある。北西部地域の開発にともなって南部地域では集落の規模を縮小し、拠点を移した可能性を考えられる。

平安時代以降は、遺跡の南部地域および北西部地域とともに集落の規模は縮小傾向にある。北西部地域の状況については、耕作地の範囲との関連によるものではないかとみられ、集落の性格が有力者集団の居住域から小規模な農村へと変化した可能性が指摘されている〔(財) 大阪府文化財センター 2002〕。南部地域においても、平安時代以降の遺構や出土遺物はごく僅かで、活発に集落が営まれていたとは考えにくい。北西部地域でみられる耕地化が南部地域にも及んでいたと思われる。

以上、宿久庄西遺跡における時期ごとの居住域の変遷を未報告の資料も含めながら概観してきた。周辺は南方を旧山陽道が東西に走る交通の要衝の地である。今回報告した調査成果によって、飛鳥時代から当地において集落が営まれていたことが判明し、勝尾寺川流域に所在する庄田遺跡〔(財) 大阪府文化財調査研究センター 1999〕や栗生間谷遺跡〔(財) 大阪府文化財センター 2003〕などの諸遺跡にみられるような奈良時代に広がる集落の端緒となった可能性も指摘されるものである。

本来ならば、15-1区で確認された飛鳥時代の竪穴建物や、遺跡そのものの性格、位置付けなどについても検討を進めるべきではあるが、そこまでには及ばなかった。

いずれにせよ、今回の調査成果は、周辺域での調査事例が少ない現状において極めて重要な知見を加えることとなった。今後、周辺での調査事例の更なる追加によって時期ごとの居住域をより詳細に検討し、宿久庄西遺跡の古代における集落の様相がより明らかになることを期待したい。

[参考文献]

- 茨木市史編さん委員会 2003『新修 茨木市史』第四巻史料編 古代中世
- 大阪府教育委員会 1997『秦施寺・麻生中下代遺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会 1977『陶邑 II』大阪府文化財調査報告書 第 29 帯
- 木庭元晴 2012「基盤地質」「山地と平野の地形のしくみ」『新修 茨木市史』第一巻通史 1 茨木市史編さん委員会
- 合田幸美 2011「古代の堅穴建物—大阪府を中心に—」『大阪文化財研究 第 39 号』((公財) 大阪府文化財センター編集・発行)
- (財) 大阪府文化財調査研究センター 1999『庄田遺跡』(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第 35 集)
- (財) 大阪府文化財センター 2002『宿久庄西遺跡』(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第 80 集)
- (財) 大阪府文化財センター 2003『粟生間谷遺跡 古代・中世編』(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第 85 集)
- (財) 大阪府文化財センター 2004『總持寺遺跡 II』(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第 117 集)
- (財) 大阪府文化財センター 2005『はざみ山遺跡』(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第 135 集)
- (財) 枚方市文化財研究調査会 1994「12 九頭神遺跡 (第 53 次調査)」「枚方市文化財年報 13 (1991 年度分)』
- (財) 枚方市文化財研究調査会 2004『九頭神遺跡 II』(枚方市文化財調査報告第 44 集)
- 菅原正明 1983『畿内における土釜の製作と流通』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集
- 寝屋川市教育委員会 1986『高宮遺跡発掘調査概要報告』(寝屋川市文化財資料 9)
- 枚方市教育委員会 1988『九頭神遺跡第 19・20 次発掘調査概要』『枚方市埋蔵文化財発掘調査概要』(枚方市文化財調査報告第 20 集)
- 枚方市教育委員会 1993『九頭神遺跡第 67 次発掘調査概要』『枚方市埋蔵文化財発掘調査概要 1992』(枚方市文化財調査報告第 27 集)
- 枚方市教育委員会 1997「I. 九頭神遺跡 (37・45 次)」「枚方市埋蔵文化財発掘調査概要 1990」(枚方市文化財調査報告第 24 集)
- 森本敬・廣瀬時習・島崎久恵・市村慎太郎 2007『攝河泉古墳時代集落の基礎研究』『調査研究報告 第 5 集』(財) 大阪府文化財センター編集・発行)
- 吉田知史 2012「大阪府内の様相」『第 61 回埋蔵文化財研究集会 集落から見た 7 世紀—律令体制成立期前後における地域社会の変貌— 発表要旨集』(埋蔵文化財研究会・第 61 回埋蔵文化財研究集会実行委員会編集・発行)

表 1 94-2 区出土遺物観察表 (1)

擇因 番号	同版 番号	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
6-1	14	包含層	土師器	杯	L径：(14.8) 器高：△4.6	L縁部 1/8径、体部 1/6	外：7.5YR5/4にぶい褐 内：5YR6/6褐 削：7.5YR6/4にぶい褐	やや粗(3mm以内)のチャート、長石、石英、クサリ(鐵含む)	外面：ヨコナデ、ヘラミガ 半 内面：ヨコナデ、暗文	
6-2	14	包含層	土師器	杯	L径：(14.8) 器高：△4.4	L縁部 1/8径、体部 1/6	外：7.5YR5/6明赤褐 内：5YR6/6褐 削：7.5YR6/4にぶい褐	密(2.5mm以内)のチャート、長石、石英、クサリ(鐵含む)	外面：ヨコナデ、ヨコ方向 ヘラミガ、ヘラケズリ(方 面不明)	
6-3	14	包含層	土師器	杯	L径：(15.4) 器高：△4.7	L縁部 3/8径、体 6/16底 削：5/16	外・内・5S5YR5/6明赤褐 削8/1	密(2.5mm以内)の長石、チャート、石英、クサリ(鐵含む)	外面：ヨコナデ、ヘラミガ 半 内面：ヨコナデ、暗文	
6-4	14	包含層	土師器	杯	L径：(14.0) 器高： △3.65 底径： 10.05	L縁部 3/8径、体 6/16底 削：5/16	外：7.5YR6/4Cにぶい褐 7.5YR7/4にぶい褐 内：10YR6/3にぶい黄褐 削：10YR7/3にぶい黄褐 削：7.5YR7/4Cにぶい褐	密(3mm以内)の砂粒(合む)	外面：ヨコナデ、ヘラミガ 半 内面：ヨコナデ、ナデ L縫部：黒斑	
6-5	14	包含層	土師器	杯	L径：(17.5) 器高： △3.0	1/4	外：7.5YR5/2Cにぶい褐 7.5YR6/4にぶい褐 7.5YR5/2Cにぶい褐 7.5YR6/3にぶい褐 削：7.5YR6/6褐	密(φ～1mm以下の石粒 を微量に含む)	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ	
6-6	14	包含層	土師器	高杯	L径：(18.6) 器高： △3.3	1/8	外・内・5S5YR6/6	密(φ～4mm程度の石粒 を中量含む)	外面：ヨコナデ 内面：暗文、ヨコナデ	
6-7	14	包含層	土師器	罐	L径： △3.15 器高： △6.2	L縁部 1/12頭 削：5/16	外：10YR6/3にぶい黄褐 10YR8/3浅黃褐 削：7.5YR7/4Cにぶい褐 削：10YR8/3浅黃褐	密(2mm以内のチャート、 長石、石英、クサリ(鐵含む))	外面：ヨコナデ、タテハケ (5本/cm) 内面：ヨコハケ(5本/cm、 ナデ)	
6-8	14	包含層	土師器	高环 脚	器高： (10.35)	脚のみ 削部は全粗 脚	外：7.5YR5/4Cにぶい褐 内・5S5YR6/6褐	やや粗(1.5mm以内のチャ ート、長石、石英、クサ リ(鐵含む))	外面：ケズリ、面取り 内面：ナデ	脚部の横断面 はほぼ八角形
6-9	14	包含層	土師器	壺	L径： △1.25 器高： △3.45	L縁部 1/8頭 削：5/16	外・内：10YR6/3浅黃褐 削：10YR7/4Cにぶい褐	密(2mm以内の長石、チャ ート、石英、クサリ(鐵含 む))	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	内外面とも磨 滅
6-10	15	包含層	土師器	壺	L径：(17.5) 器高： △6.4	L縁部 1/9頭 削：5/16 1/6	外：10YR6/3にぶい黄褐 10YR8/2灰白 削：10YR7/3にぶい褐	密(2mm以内の長石、チャ ート、石英、クサリ(鐵含 む))	外面：ヨコナデ、ユビナ デ、ユビオサエ 内面：ヨコナデ、内面と 外側	
6-11	15	包含層	土師器	壺	L径：(22.3) 器高： △5.8	L縁部 1/3	95：7.5YR7/3にぶい褐 7.5YR8/3浅黃褐 削：5YR6/6褐、10YR8/3 浅黃褐	やや密(φ～1mm程度の 石英、長石を中量含む)	外面：ヨコナデ、ユビオサ エ 内面：ヨコナデ	
6-12	15	包含層	土師器	壺	L径：(23.6) 器高： △5.36	L縁部 1/8	外・内：10YR7/4にぶい褐 削：5YR6/6褐	やや密(φ～3mm程度の 石英、長石を中量含む)	外面：ヨコナデ、ハケのち ナデ 内面：ヨコナデ、ハケ	
6-13	15	包含層	土師器	壺	L径：(23.5) 器高： △2.25	L縁部 1/10	外：10YR8/3浅黃褐 内：10YR8/2灰白 10YR8/3浅黃褐 削：10YR8/3浅黃褐	やや密(φ～4mm程度の 石英、長石をやや多く含 む)	外外面：ナデ L縫部に1条 の状線	
6-14	14	包含層	土師器	壺	L径：(30.2) 器高： △8.7	L縁部 1/12	外：10YR8/4浅黃褐、 7.5YR7/4にぶい褐 内：10YR8/2灰白 削：10YR7/4Cにぶい黄褐、 10YR8/2灰白	密(φ～1mm程度の石 英、長石を少量含む)	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ナデ	外面とも磨 滅が激しい
6-15	15	包含層	土師器	把手	幅△5.5 把手厚△1.4	片側の 把手	内・外：10YR7/4にぶい褐 削：10YR8/2灰白	密(2mm以内のチャート、 長石、石英、クサリ(鐵含 む))	外面：ユビナデ、ハケ (8本/cm)、ユビオサエ 内面：ユビナデ	
6-16	15	包含層	土師器	把手	幅△7.5 把手厚△0.7	7体部 片把手	内・外：5YR6/6褐、2.5Y/5 削：5YR6/6褐 内・削：7.5YR6/6褐	やや粗(2mm以内のチャ ート、長石、石英、クサリ (鐵含む))	外面：ユビナデ、ユビオサ エ 内面：ユビオサエ	
6-17	15	包含層	土師器	把手	幅△7.3 把手厚△1.85	片側の 把手	内・外：10YR7/4にぶい褐 削：10YR8/2灰白	やや密(φ～4mm程度の 石英、長石を中量含む)	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ	
6-18	15	包含層	陶器	壺	高台径： (8.1) 器高： △2.45	体部下 方～高 台1/5	外：10YR7/4灰白 内：10YR8/1灰白 2.5G/7/1明オーラブ(灰白) 削：10YR8/1灰白	密(φ～1mm以下の石粒 を微量に含む)	輪輪、ヨコナデ 内面：輪輪、ナデ	内面：重ね燒 き跡
7-19	14	包含層	須恵器	杯蓋	L径：(9.2) 器高： △3.1	1/3	外・内：10YR8/1灰白 削：7.5YR7/4にぶい褐	密(φ～1mm以下の石粒 を微量に含む)	外輪：回転ナデ、未調整 内面：回転ナデ	焼成不良
7-20	14	包含層	須恵器	杯蓋	L径： (10.05) 器高： △3.5	L縁部 1/8 体部近 完 天井部 完形	95：2.5Y/6/1黄灰、 2.5Y/7/1灰 内：2.5Y/7/1灰白 削：5Y/6/1灰	やや粗(2mm以内の砂粒含 む)	外輪：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	
7-21	15	包含層	須恵器	杯蓋	L径：11.7 器高：3.8	3/4	95：10YR6/1灰灰、5Y/7/1 灰白 内：N7/H白 削：2.5Y/7/1灰白、 2.5Y/5/1黄灰	やや密(φ～5mm程度の 石粒を中量含む)	外輪：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 内面：回転ナデ	

表2 94-2 区出土遺物観察表 (2)

標団番号	回収番号	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色 調	胎 土	調 整	備 考
7-22	16	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(12.5) 器高：△3.45	1/4	外・内・断：N5/灰	密(φ～4mm程度の石粒を少量含む)	外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：ヘラ記号
7-23	15	包含層	須恵器	杯蓋	口径：12.6 器高：4.2	7/8	外：2.5Y7/1黄灰 内：N6/灰 断：10YR5/3にぶい黄褐色	密(φ～4mm程度の石粒を少量含む)	外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 内面：回転ナデ	
7-24	16	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(13.0) 器高：△3.15	1/4	外：5Y7/1灰白 内：N7/9灰白 断：2.5Y5/1黄灰	密(φ～3mm程度の石粒を少量含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	
7-25	15	包含層	須恵器	杯身	口径：(10.0) 器高：△3.6	1/3	外・内・断：N6/灰	密(φ～4mm程度の石粒を少量含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	
7-26	15	包含層	須恵器	杯身	口径：10.2 器高：3.85	完存	外：10YR8/1灰白・ 2.5Y6/1黄灰 内：2.5Y7/2灰黄 断：2.5Y8/1灰白	密(φ～3mm程度の石粒を少量含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	
7-27	16	包含層	須恵器	杯身	口径：(10.4) 器高：3.8	1/2	外・内：N6/灰 断：N5/灰・10YR6/3にぶい黄褐色	密(φ～4mm程度の石粒を少量含む)	外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 内面：回転ナデ	
7-28	16	包含層	須恵器	杯身	口径：10.6 器高：△3.7	4/5	外：2.5Y6/1黄灰 内：N5/9 断：N6/9	密(φ～4mm程度の石粒を少量含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	
7-29	16	包含層	須恵器	杯身	受部径： 1.9mm 天井部 受部～ 底部2/3 器高：△3.9	1/2	外：2.5Y8/2灰白1・ 10YR8/1灰白 内：7.5YR8/3浅黃褐色	密(φ～1mm程度の石粒を微量に含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	焼成不良
7-30	16	包含層	須恵器	杯身	受部径： 13.6 器高：△3.5	1/3	外：2.5Y8/1灰白 内：2.5Y6/2灰白 断：2.5Y8/2灰白	密(φ～1mm程度の石粒を微量に含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	焼成不良
7-31	16	包含層	須恵器	杯身	口径：(12.2) 器高：△3.8	1/2	外：N5/9・5Y5/1灰 内：N6/9 断：10YR6/2灰黄褐色	密(φ～1mm程度の石粒を微量に含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	底部に空洞あり
7-32	16	包含層	須恵器	つまみ	つまみ径： 3.3 器高：△1.3	完存	外：2.5Y6/1黄灰・N4/9 内：N5/9 断：2.5Y7/1灰白	密(φ～4mm程度の石粒を少量含む)	内外面：回転ナデ	
7-33	16	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(10.3) 器高：△1.25	1/2	外・内・断：2.5Y6/1黄灰	密(1.5mm以内の砂粒含む)	外面：回転ナデ、 つまみ部分取付けのための回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	外面に焼成前のキズ(?)
7-34	16	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(13.3) 器高：△1.35	天井部 ～L部 部1/4	外・内：N6/灰 断：N5/9	密(φ～1mm程度の石粒を微量に含む)	内外面：回転ナデ	
7-35	16	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(13.6) 器高：△1.55	1/2	外・内・断：2.5Y6/1黄灰	密(2mm以内の砂粒含む)	外面：回転ヘラケズリ、 つまみ部分取付けのための回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	内面に重ね焼き痕
7-36	17	包含層	須恵器	杯蓋	口径： 1.7 (14.15) 体部： △3.2	1/4	外：N6/9 内：N6/9 断：5Y6/1灰	密(2mm以内の砂粒含む)	外面：回転ナデ、 つまみ部分取付けのための回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	
7-37	17	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(14.6) 器高：△1.8	1/4	外・内・断：2.5Y6/1黄灰	密(φ～1mm程度の石粒を微量に含む)	内外面：回転ナデ	
7-38	17	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(14.1) 器高：△1.7	1/8	外：N6/9・10YR5/1灰白 内：2.5Y6/1黄灰 断：N6/9	密(φ～1mm程度の石粒を少量含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	
7-39	17	包含層	須恵器	杯蓋	口径： △1.25	1/7	外：2.5Y7/1・8/1灰白 内・断：2.5Y7/1灰白	密(1mm以下の砂粒含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面とも磨滅
7-40	17	包含層	須恵器	杯蓋	器高： △2.15	1/4	外・内・断：2.5Y8/1灰白	密(1.5mm以内の砂粒含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
7-41	17	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(16.4) 器高：△2.1	1/7	外：10YR6/1灰白 内：10YR7/1灰白 断：10YR6/1灰白	密(φ～1mm程度の石粒を微量に含む)	内外面：回転ナデ	
7-42	17	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(16.8) 器高：△2.4	1/6	外・内：2.5Y6/1灰白 断：10YR6/1灰白	密(φ～2mm程度の石粒を微量に含む)	内外面：回転ナデ	
7-43	17	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(19.0) 器高：△3.0	1/9	外：10YR7/1灰白 内：10YR6/1褐灰 断：10YR7/1灰白	密(φ～1mm以下の石粒を微量に含む)	内外面：回転ナデ	

表3 94-2 区出土遺物観察表 (3)

擇因 番号	同版 番号	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
7-44	17	包含層	須恵器	杯	L径 : (14.6) 部高 : 2.9 底径 : (11.05)	L縁部 部、体 部1/6	外 : 2.5YR1/1黄灰・ 2.5Y7/2灰黃 内 : 2.5Y7/1灰白 断 : 2.5YR1/1黄灰	密(1mm以内の砂粒含む)	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	外面部に焼成前のキズ (?)あり
7-45	17	包含層	須恵器	杯	底径 : (10.5) 部高 : △4.15	高台1/2 体部下 方1/4	外 : 2.5YR2/2灰白 内 : N7/H白 断 : N5/H・5Y7/1灰白	密(φ～1mm程度の石粒 を微量に含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	
7-46	18	包含層	須恵器	盃	L径 : (14.6) 部高 : △2.23	L縁部 1/4	外 : 5Y5/1H・2.5Y6/1黄 内 : 2.5Y7/2灰黃 断 : 10YR8/3浅灰褐	密(2mm以内のチャート、 長石、石英含む)	内外面：回転ナデ	
7-47	18	包含層	須恵器	盃	底径 : (8.49) 部高 : △2.7	体部～ 脚部1/3	外 : N6/H 内 : N7/H白 断 : 10YR8/1H白	密(φ～3mm程度の石粒 を中量含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	
7-48	18	包含層	須恵器	甕	L径 : (17.3) 部高 : △4.5	L縁部 1/12 脚部1/6	外 : 2.5Y7/2灰黃 内 : 2.5Y7/3浅灰黃 断 : 2.5Y7/3浅黄	密(0.5mm以内の砂粒含む)	外面：ヨコナデ、平行タタ キ(3本/m)のちカキ目(5本/ m) 内面：ヨコナデ、同心円タ タキ	
7-49	18	包含層	須恵器	甕	L径 : (16.1) 部高 : △6.05	L縁部 1/8 脚部1/4 脚部1/8	外 : 5Y3/1オリーブ黒 内 : 2.5Y5/1暗灰黃 断 : 2.5Y7/2灰黃	やや粗(1mm以内の砂粒含 む)	外面：ヨコナデ、平行タタ キ(3本/m)のちカキ目(10～ 11本/m) 内面：ヨコナデ、同心円タ タキ	
7-50	17	包含層	須恵器	甕	L径 : (18.05) 部高 : △7.3	L縁部 1/2 脚部1/2 脚部1/8	外 : 2.5Y6/2灰黃・ 2.5Y4/1灰 内 : 2.5Y5/1黄 断 : 2.5Y7/3浅黄	やや粗(1mm以内の砂粒含 む)	外面：ヨコナデ、平行タタ キ(4本/m)のちヨコナデ、 平行タタキ(4本/m)のち 半目(8本/cm) 内面：ヨコナデ、同心円タ タキ	
7-51	17	包含層	須恵器	圓面 鏡	部高 : △2.35	体部1/6	外 : 10YR6/1灰 2.5Y4/1灰 内 : 2.5Y5/1黄 断 : 7.5YR5/1灰 断	密(2mm以内の砂粒含む)	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ヨコナデ の前にヨビオサエ	透孔2.5個残 存
8-52	18	SP6	須恵器	身	L径 : (14.7) 部高 : 5.8	2/3	外 : 10YR8/1H白・ 2.5Y6/2灰 内 : 2.5Y8/2灰白 断 : 2.5Y7/4C・E・I相 互	やや密(φ～2mm程度の 石英、長石を少量含む)	外面：回転ヘラケズり、 回転ナデ、カキ目 内面：回転ナデ	
8-53	18	SP6	須恵器	高杯	脚部径 : 部高 : △2.1	脚柱部 少し	外 : 2.5Y5/1黄 内 : 10YR7/1灰 断 : 10YR6/1灰 断	密(φ～1mm以下の石粒 を少量含む)	外面：回転ナデ、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	
8-54	18	SP10	須恵器	台付 甕	底径 : (8.6) 部高 : △3.6	底部1/2	外 : N6/H 内 : 2.5Y6/1黄 断 : 2.5Y6/2黄	密(2mm以内の砂粒含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
8-55	19	SP11	須恵器	甕	底径 : (10.8) 部高 : △2.25	底部1/4	外 : 2.5Y6/2灰黃・ 2.5Y7/2灰 内 : 2.5Y7/2灰 断 : 2.5Y7/1灰 断	密(φ～2mm程度の石粒 を少量含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、底部糸切 り痕	焼成不良
8-56	18	SP42	須恵器	杯蓋	L径 : 12.2 部高 : 4.15	近完形	外 : 2.5Y6/2灰黃・ 2.5Y7/3灰黃 内 : 断 : 10YR8/4浅灰褐	やや粗(2.5mm以下の砂粒 含む)	外面：回転ヘラケズり、 回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	
8-57	19	SP43	土師器	杯	L径 : (14.4) 部高 : 3.65 底径 : (11.85)	L縁部 1/4 体部 5/16 底部1/2 脚	外 : N・内 : 5YR6/6相 内 : N・内 : 5YR6/6相	密(2mm以内のチャート、 長石、石英、クサリ礁 含む)	外面：ヨコナデ、ナデ、ユ ビオサエ 内面：ヨコナデのち暗文	
8-58	19	SP43	土師器	甕	L径 : (22.7) 部高 : △7.45	L縁部 1/4相 脚部1/4 脚部1/6	外 : 内・断 : 10YR7/4C・E 内 : 2.5Y6/1黄 断 : 10YR7/3にぶい黄 相	密(4mm以内の長石、チャ ート、石英、クサリ礁、 雲母含む)	外面：ヨコナデ、ユビオサ エ、ハケ(5本/m) 内面：ヨコナデ、ヘラケズ り	全体的に焼減
8-59	19	SP44	須恵器	杯蓋	L径 : (13.8) 部高 : △1.55	1/2	外 : 2.5Y7/1灰白・ 2.5Y5/1灰 内 : N7/H白 断 : N6/H・N7/H白	密(φ～6mm程度の石粒 を少量含む)	外面：回転ヘラケズり、 回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	
8-60	19	SP44	須恵器	甕	底径 : (9.3) 部高 : △1.75	底部1/4	外 : N7/H白・2.5Y4/1黄 内 : N7/H白 断 : 2.5Y7/1灰白	密(φ～1mm程度の石 粒を微量に含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
8-61	19	SP44	須恵器	高杯	脚部径 : 部高 : △1.55	脚部1/7	外 : N7/H白・2.5Y4/1黄 内 : N7/H白 断 : 2.5Y6/3にぶい黄 相	密(φ～3mm程度の石 粒を微量に含む)	内外面：回転ナデ 外面：自然釉	
8-62	19	SP44	須恵器	高杯	脚部径 : 部高 : △1.55	脚部1/7	外 : 2.5Y7/2灰黃 内 : 2.5Y7/2灰黃 断 : 2.5Y8/1灰白	密(φ～1mm程度の石粒 を少量含む)	内外面：回転ナデ	
8-63	19	SP45	土師器	甕	L径 : (12.6) 部高 : △3.3	L縁部 1/8相 脚部 3/16	外 : 7.5YR7/3にぶい黄 内 : 断 : 10YR7/3にぶい黄 相	密(0.5mm以下のチャー ト、長石、石英、クサリ 礁含む)	外面：ヨコナデ、ハケ目 内面：ハケ(5本/m), ハケ目(3本/m)	

表4 94-2・15-1区出土遺物觀察表

標識番号	回収番号	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
8-64	19	SP46	土加器	杯	口径：(11.95) 器高：4.7	L縁部、体 部1/3 底部1/4	外：5YR5/6明赤褐色 内：灰・断：5YR6/6稍 黄	密(2mm以内のチャート、長 石、クサリ礫含む)	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ヘラミガ 牛	
8-65	19	SP46	須恵器	杯身	口径：(9.6) 器高：3.05	L縁部、体 部1/4削 底部1/4削	外・内・断：10YR6/1灰褐色	密(2mm以内の砂粒含む)	内外面：回転ナデ	
8-66	19	SP58	須恵器	杯身	口径：(11.7) 器高：4.1	L縁部1/2 体部1/8	外：2.5Y5/1黄灰 内：灰・断：2.5Y5/2灰褐色	密(1mm以内の砂粒含む)	外面：2mm以内のチャート、 長石、石灰、クサリ礫含む 内面：回転ナデ	
8-67	19	SP75	土加器	台付 鉢	口径：(5.1) 器高：6.4	L縁部 底部	外：10YR7/2に5Y5/1黄褐色 10YR6/3に5Y5/1黄褐色 内：2.5Y5/3灰褐色	密(2mm以内のチャート、 長石、石灰、クサリ礫含む) 内・断：2.5Y5/3灰褐色	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ヘラミガ 牛、ヨコナデ、ナデ 内・断：滅滅の不分明	
8-68	19	SP75	須恵器	杯身	口径：(12.85) 器高：3.4	L縁部、体 部1/8削	外：5YR5/1黄灰・N6/灰 内：N6/灰 断：5YR5/1灰	密(1mm以内の砂粒含む)	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	外面：うすく 灰かぶり
11-69	21	包含層	土加器	杯	口径：(11.9) 器高：3.1	1/7	外・内・断：5YR6/6稍 黄	密(φ～1mm以下の長石 を微量に含む)	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、暗文	
11-70	21	包含層	土加器	杯	口径：(13.8) 器高：3.2	1/8	外：10YR7/4に5Y5/1黄褐色 10YR4/1灰褐色 内：5YR6/6稍 断：10YR8/4灰褐色	密(φ～1mm程度の長 石を微量に含む)	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、暗文	
11-71	21	包含層	土加器	甕	口径：(23.0) 器高：△4.9	L縁部 1/5	外：7.5YR6/6に5Y5/1 黄褐色、N6/灰 内：10YR4/2灰褐色、 10YR4/1灰褐色・ 7.5YR8/4灰褐色 断：7.5YR8/4灰褐色	密(φ～1mm程度の長石 を微量に含む)	外面：ナデ、ハケ(白cm) 内面：ヨコハケ、ナデ	
11-72	21	包含層	土加器	甕	口径：(24.4) 器高：△3.8	L縁部 1/2	外：7.5YR7/6稍 10YR4/4灰褐色 7.5YR7/6稍 10YR7/3に5Y5/1黄褐色 断：10YR7/3に5Y5/1黄褐色	やや密(φ～3mm程度の 長石、クサリ礫を少量含む)	外面：ナデ、 内面：ハケ、ナデ	
11-73	21	包含層	土加器	把手	幅：△3.1 把手のみ 1/2	把手の 内側	外：10YR7/4に5Y5/1黄褐色 断：10YR8/4灰褐色	密(φ2mm以内のチャー ト、長石、芸母、クサリ 礫含む)	全体にユビナデ	
11-74	20	包含層	土加器	羽釜	口径：(23.65) 器高：△2.67	L縁部 1/6 跨部ご く一部	外・内・断：7.5YR6/6稍 黄	やや粗(φ3mm以内のチ ート、長石、石灰、ク サリ礫含む)	外面：ナデ、 内面：ナデ、ユビオサエ	
11-75	20	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(12.8) 器高：3.05	1/4	外：2.5Y6/1黄灰 内：N7/9白 断：2.5Y6/1黄灰・N7/9 白	密(φ～1mm程度の長石 を少量含む)	外面：回転ナデケズリ、 回転ナデ	
11-76	20	包含層	須恵器	杯身	口径：(10.9) 器高：3.0	1/2	外：2.5Y7/1灰白・N6/灰 内：10YR6/6灰褐色 2.5Y5/1灰褐色 断：7.5YR7/3に5Y5/1稍 10YR7/1灰褐色	やや密(φ～2mm程度の 長石を微量に含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラ ケズリ 内面：回転ナデ	
11-77	20	包含層	須恵器	杯身	口径：(9.5) 器高：3.3	1/2	外：N5/9 内：N6/9 断：N6/9・5YR6/1灰褐色	密(φ～3mm程度の長石 を微量に含む)	外面：回転ナデ、ナデ、ヘ ラ切り 内面：回転ナデ	
11-78	20	包含層	須恵器	杯	口径：(12.6) 器高：△2.5	1/3	外：N5/9 内：N6/9・N7/9白 断：N6/9・5YR6/1灰褐色	密(φ～1mm程度の長石 を少量含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラ ケズリのちナデ 内面：回転ナデ	
11-79	20	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(12.9) 器高：2.9	1/2	外：2.5Y6/1黄灰 内：N7/9白 断：N6/9・10YR7/1灰褐色	密(φ～1mm程度の長石 を少量含む)	外面：回転ナデ、回転ヘラ ケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	
11-80	21	包含層	須恵器	杯蓋	口径：(4.0) 器高：△1.3	1/3	外：N6/9 内：N7/9白 断：N7/9白	密(φ～1mm程度の石英 長石を微量に含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
11-81	21	包含層	須恵器	杯	口径：(14.4) 器高：△3.7	L縁部、体 部1/4	外・内：2.5Y6/1灰褐色 断：2.5Y5/1黄灰	密(φ～1mm程度の長石 を含む)	内外面：回転ナデ	
11-82	20	包含層	須恵器	杯	口径：(3.2) 底径：(8.55)	体部3/8	外：10YR6/1灰褐色 内：10YR7/1灰褐色 断：10YR5/1灰褐色	やや粗(φ～5mm程度の 長石含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
11-83	20	包含層	須恵器	杯	器高：(2.8) 底径：(8.8)	体部1/8 底部1/2	外・内・断：10YR7/1灰白	やや粗(φ～1mm程度の 長石含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
11-84	21	包含層	須恵器	杯	器高：(2.25) 底径：(9.45)	底径1/4	外・内・断：5Y6/1灰 白	密(φ～2mm程度の長石 を含む)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
11-85	21	包含層	須恵器	杯	器高：(1.35) 底径：(9.8)	底部1/7	外・内・断：2.5Y7/2灰黃	密(φ2mm以内の長石、 クサリ礫含む)	外面：ヨコナデ 内面：多方向のナデ	貼付高台
11-86	20	包含層	須恵器	高杯	器高：△5.3	体部1/5	外・内・断：2.5Y6/1黄灰	密(φ～1mm程度の長石 を含む)	外面：ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ	高台付着物有
11-87	21	包含層	須恵器	高杯	器高：△5.3	体部1/5	外・内・断：2.5Y6/1黄灰	密(φ～1mm程度の長石 を含む)	外面：ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ	

表5 15-1区出土遺物観察表(1)

検査番号	回収番号	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
11-88	21	包含層	須恵器	壺	器高:△7.3 腹径:△16.25	体部1/3	外:2.5YR6/1黄灰・ 2.5Y7/2灰黃 内:5Y6/1灰 5Y6/1灰・2.5Y7/2灰 黄	やや粗(φ2mm以下の長 石含む)	外側:回転ナデ、手持ち ヨコ方向ナデ、1毛ヘラケ ズリ 内面:回転ナデ	
11-89	21	包含層	須恵器	台付壺	器高:△3.3	体部1/7 底部1/2	外:内:5Y5/1灰 断:10YR6/2灰黃褐	やや粗(φ~2mm程度の 長石含む)	外側:回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	
11-90	20	包含層	須恵器	壺	L1径:(21.4) 器高:△4.05	L縁部5/24	外:2.5Y6/1黄灰・ 2.5Y4/1灰 内:2.5Y6/1黄灰 断:2.5Y5/1黄灰	密(φ2mm以内の長石含 む)	外側:ヨコナデ 内面:灰かぶり	
13-91	22	SP3	須恵器	杯	L1径:(9.7) 器高:△2.28	1/4	外:N6/灰 内:N6/灰 断:N6/灰・2.5Y6/1黄灰	密(φ~1mm以下の長石 を微量に含む)	外側:回転ナデ、回転ヘラ ケズリ 内面:回転ナデ	
15-92	22	SI1 壓溝	須恵器	杯身	L1径:10.3 器高:3.6	L縁部1/2 底部1/2	外:N5/灰 内:断:N6/灰	やや粗(φ2mm以内の砂 粒含む)	外側:回転ナデ、回転ヘラ ケズリ 内面:回転ナデ	外面:重ね焼 き跡
15-93	24	SI1	須恵器	知頭壺	L1径:(9.0) 器高:△0.8	L縁部1/5	外:内・断:N5/灰	密(φ~1mm程度の長石 含む)	外側:ヨコナデ	
17-94	22	SK2	瓦器	檐	L1径:(15.5) 器高:6.2 底径:7.0	L縁部2/3 底部1/3	外:N5/白・10YR8/2灰白 内:N5/白・2.5Y7/1灰白 断:2.5Y8/2灰白	密(φ1mm以内の砂粒含 む)	外側:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、暗文	
17-95	22	SK2	瓦器	檐	L1径: 器高:△1.7 底径:(7.7)	L縁部1/2	外:N5/白・2.5Y8/2灰白 内:2.5Y8/2灰白	密(φ~1mm程度の長石 含む)	外側:ヨコナデ 内面:暗消の為不明	
18-96	22	SK4	土師器	高环	L1径:13.25 器高:△6.6	L縁部3/5 底部近完 脚部1/5	外:2.5Y8/2灰白・7/2灰 内:2.5Y8/2灰白	密(φ3mm以内のチュー ト・長石、石英、クサリ 礁含む)	外側:ヨコナデ、脚部磨 滅の為不明	
18-97	24	SK4	土師器	把手	L1径: 把手厚み: 2.35	把手手 2.35	外:N5/白・2.5Y7/1・ 2/2	密(φ3mm以内のチュー ト・長石、クサリ礁含む)	外側:ヨビナデ 内面:ヨビオサエ	
18-98	22	SK4	土師器	壺	L1径:(38.7) 器高:△7.15	L縁部1/8	外:7.5YR7/4にぶい橙・ 10YR7/3にぶい黄橙・ 10YR6/2灰黄褐 内:7.5YR7/4にぶい橙 断:10YR8/4浅黄褐・ 10YR5/1灰褐	密(φ~3mm程度の長石 を微量に含む)	外側:ヨコナデ、ハケ 内面:ヨコナデ、ハケ	
18-99	24	SK4	須恵器	杯身	器高: △3.25	L縁部1/10 底部1/8	外:2.5Y7/1灰白・5Y5/4 オリーブ	密(φ~1mm程度の長石 含む)	外側:回転ナデ、回転ヘラ ケズリ 内面:回転ナデ	外面:自然釉
18-100	22	SK4	須恵器	杯蓋	L1径:(14.8) 器高:2.1	1/2	外:N5/白 内:2.5Y6/1黄灰・ 2.5Y7/1灰白	密(φ~4mm程度の長石 を少量含む)	外側:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	外面:自然釉
18-101	24	SK4	須恵器	壺	L1径:(11.7) 器高:(2.0)	L縁部1/6	外:N5/灰 内:2.5Y6/1黄灰	密(φ~2mm程度の長石 含む)	外側:ヨコナデ	
19-102	24	SX2	土師器	把手	L1径:△9.85 把手厚み: 6.5	把手厚 分ごく一部	外:10YR7/4にぶい黄橙 10YR8/4浅黄褐 内:10YR8/4浅黄褐 断:10YR8/3浅黄褐	やや密(φ~3mm程度の 長石、チャートを少量含 む)	外側:ハケ、ユビオサエ 内面:ユビオサエ	
19-103	24	SX2	須恵器	杯身	L1径:(12.5) 器高:(2.0)	L縁部1/8 底部1/8	外:N5/白・断:10YR7/1灰白	密(φ~1mm程度の長石 ごく少量含む)	外側:回転ナデ	
19-104	23	SX2	須恵器	平瓶	L1径:6.2 器高:△5.3	L縁部完 形	外:内:2.5YR6/1黄灰 断:2.5Y7/1灰白	密(φ2mm以内の長石含 む)	外側:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	
19-105	22	SX2	須恵器	壺	L1径:(21.5) 器高:△5.85	L縁部1/4 底部1/6	外:10YR6/1灰褐・ 2.5YR5/2灰褐黄 内:10YR5/1灰褐 断:10YR7/1灰白	やや粗(φ2mm以内の長 石含む)	外側:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、同心内タ キ	外面:灰かぶり
19-106	22	SX2	須恵器	壺	L1径:(21.8) 器高:△4.25	L縁部1/5	外:2.5Y6/1黄灰・ 10YR4/1灰褐 内:10YR5/1灰褐 断:2.5Y6/1黄灰	密(φ~1mm程度の長石 含む)	外側:ヨコナデ、カキ目7 本/cm 内面:ヨコナデ	外面:灰かぶり
19-107	22	SX2	須恵器	壺	L1径:(23.25) 器高:△14.7	L縁部1/4 底部1/8	外:5Y6/1~5Y4/1灰 内:5Y5/1灰 断:7.5Y3/1灰褐	密(φ2mm以内の砂粒含 む)	外側:平行タキ (3本/cm) 内面:同心内タキ	外面:カキ目7 本/cm
20-108	24	SX3	土師器	壺	L1径:(15.0) 器高:△11.2	L縁部1/11 底部1/8	外:5YR6/6灰・7.5YR5/4 内:10YR6/3にぶい黄橙 7.5YR6/4にぶい黄 断:7.5YR5/4にぶい黄	密(φ2.5mm以内のチュー ト・長石、クサリ礁、青 色含む)	外側:ヨコナデ、ハケ(8本/ cm) 内面:ハケ(8本/m)、ヘラ ケズリ	外面:燐付着

表 6 15-1 区出土遺物観察表 (2)

標識番号	回収番号	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色 調	胎 土	調 整	備 考
20-109	24	SX3	土師器	甕	口径：(17.2) 器高：△5.0	L脚部 1/6	外：7.5YR6/4に赤い相・ 10YR5/2灰黄調 内：5YR5/3-5/4-5/5黄褐 相：2.5YR4/1黄灰・ 2.5YR6/6相	密(φ～3mm程度の長石 を少量含む)	外面：ナデ、タテハケ 内面：ヨコハケ、ケズリ、 ナデ	
20-110	23	SX3	土師器	羽釜	口径：(20.6) 器高：△8.85	L脚部 ～体部 上部1/4	外：7.5YR7/4に赤い相 内：10YR6/3に赤い相・ 7.5YR6/4に赤い相 相：5YR7/6相・10YR8/4 浅黄褐	密(φ～3mm程度の長石 を少量含む)	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	
20-111	24	SX3	土師器	把手	幅：7.55 把手部分 △1.55	把手部 三分之二部	外・内・斯：7.5YR7/4に 赤い相	密(φ2mm以内のチャート、 長石、クサリ礫、雲 灰母、石英含む)	外外面：ユビナデ	
20-112	23	SX3	須恵器	杯蓋	口径：(12.4) 器高：3.3	2/3	外・内：N5/灰 斯：10YR7/1灰白	密(φ～2.2mm程度の長石 を少量含む)	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	
20-113	23	SX3	須恵器	杯身	口径：(10.0) 器高：3.9	2/3	外：10YR8/1灰白・ 2.5YR6/1灰白 内：2.5YR1/1灰白 相：2.5Y7/1灰白・ 2.5Y8/2灰白	密(φ～3mm程度の長石 を少量含む)	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	
20-114	24	SX3	須恵器	杯身	口径： (11.25) 器高：△3.7	L脚部 1/12 体部1/6	外・内・斯：2.5Y7/1灰白	やや和(φ～3mm程度の 長石含む)	回転ナデ、回転ヘラ ケズリ	
20-115	24	SX3	須恵器	杯蓋	口径：(12.4) 器高：△1.1	L脚部 1/9	外・内：10YR7/1灰白 斯：10YR6/1灰灰	密(φ～1mm程度の長石 含む)	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	外側：灰かぶ り、自然縫
20-116	23	SX3	須恵器	杯	口径：(9.25) 器高：3.6	L脚部、 体 部1/8 底部1/8	外・内・斯：2.5Y7/1灰白	密(φ～2mm程度の長石 ごく少量含む)	回転ナデ、ヘラ切り のナデ	体部：粘土中の 気泡が多様に 凸凹している
20-117	24	SX3	須恵器	杯	口径： (12.25) 器高： △3.65	L脚部、 体 部1/8 底部1/3	外：10YR6/1・5/1灰灰 内・斯：10YR6/1灰灰	密(φ～1mm程度の長石 含む)	回転ナデ、ヘラ切り のナデ	
20-118	24	SX3	須恵器	杯	器高：△1.4	底部 1/15	外：N4/灰・5Y5/1灰 内：5Y5/1灰 斯：10YR5/2灰黄褐	やや和(φ～1mm程度の 長石含む)	ヨコナデ 内面：回転ナデ	
20-119	23	SX3	須恵器	高环	器高：△6.0	脚部	外・内・斯：2.5Y6/1黄灰	やや和(φ～4mm程度の 長石含む)	ヨコナデ、透孔、 ヘラ引き沈継2条残存 内面：ナデ、脚部内面ヨコ ナデ	透孔2箇所に あり
20-120	24	SX3	須恵器	高环	器高： △7.95	脚部1/2 弱	外・内：2.5Y5/1黄灰 斯：10YR6/2灰黄褐	やや和(φ～1mm程度の 長石含む)	ヨコナデ 内面：ヨコナデ、しづり痕 あり	ヘラ引き沈継 2条 透孔上下2段 2箇所あり
20-121	24	SX3	須恵器	甕	口径：(9.8) 器高：△2.6	L脚部 1/6	外・内：2.5Y5/1黄灰 斯：2.5Y6/1黄灰	密(φ3mm以内の砂粒含 む)	ヨコナデ	内面：若干の 灰かぶり
20-122	23	SX3	須恵器	鉢	器高： △3.3	L脚部 ごく一 部	外・内・斯：10YR6/1灰灰	やや和(φ～1mm程度の 長石含む)	ヨコナデ 内面：ナデ、ヨコナデ	
20-123	23	SX3	須恵器	甕	口径： (23.35) 器高： △5.2	L脚部 1/8	外：10YR6/2灰黄褐 内・斯：10YR7/1灰白	やや和(φ～1mm程度の 長石含む)	ヨコナデ、カキ目(7 ～8本/φ)	L脚上部に 自然縫
20-124	23	SX3	須恵器	甕	器高： △5.5	脚部、 倒部1/5	外・内・斯：2.5Y6/1黄灰	やや和(φ2mm以内の砂 粒含む)	ヨコナデ、平行タタ キ8本/φ、カキ目6～7/ φ	
21-125	24	SP89	須恵器	壺	口径：(8.45) 器高： △2.55	L脚部 1/5	外・内・斯：2.5Y6/1黄灰	密(φ～1mm程度の長石 含む)	ヨコナデ、同心円タ タキ	
22-126	24	SP90	土師器	甕	口径：(21.2) 器高： △2.4	1/8	外・内・斯：5YR6/6相 内：5YR7/6相	密(φ～1mm程度の長石 を少量含む)	ヨコナデ、ナデ	
22-127	23	SP90	須恵器	杯	口径：(12.1) 器高： △3.15 底部：(7.0)	1/4	外：2.5Y6/1黄灰・5Y6/1 灰 内：5Y6/1灰 斯：2.5Y7/1・灰白 2.5Y6/1黄灰	密(φ～1mm程度の長石 を少量含む)	回転ナデ、底部回転 ヘラケズリ 内面：回転ナデ	

写 真 図 版



1. 94-2 区 調査区東半部（西から）



2. 94-2 区 調査区南半部（北から）



1. 15-1 区 A 区全景 (南から)



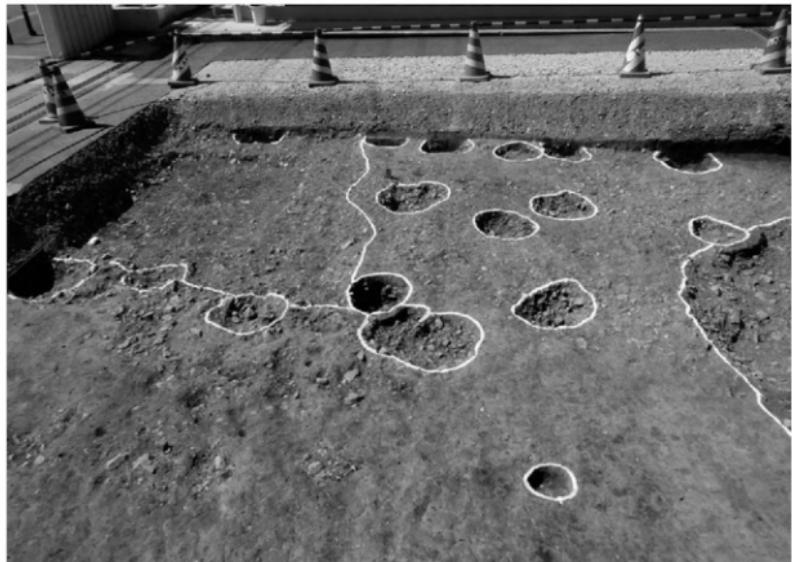
2. 15-1 区 B 区全景 (南から)



1. 15-1 区 A 区南壁断面（北西から）



2. 15-1 区 B 区南壁断面（北東から）



1. 15-1 区 SB1・2 全景 (南から)



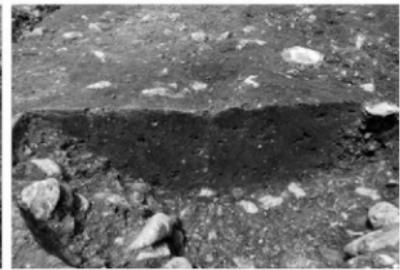
2. 15-1 区 SP1 断面 (南から)



3. 15-1 区 SP7 断面 (南から)



4. 15-1 区 SP3 断面 (南から)



5. 15-1 区 SP8 断面 (南から)



1. 15-1 区 SB3 全景 (北から)



2. 15-1 区 SP61 断面 (北から)



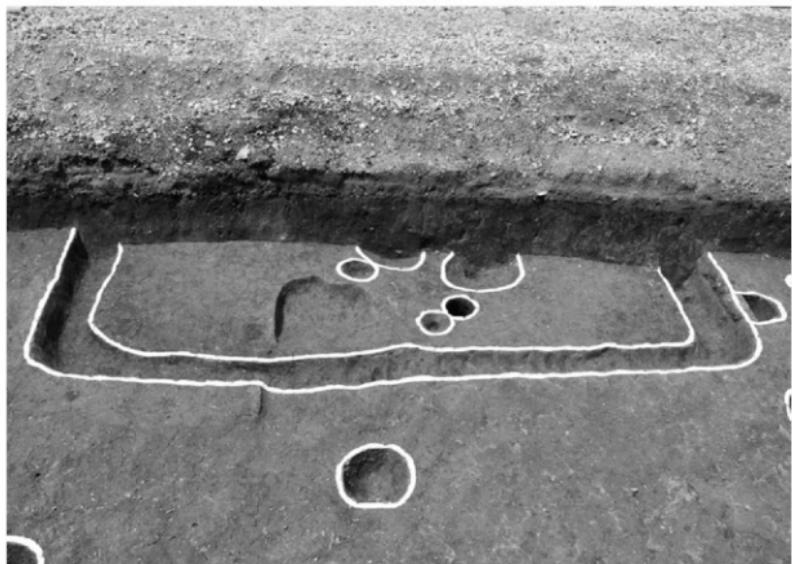
3. 15-1 区 SP63 断面 (北から)



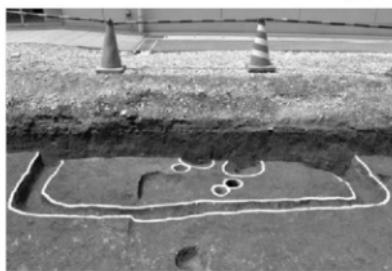
4. 15-1 区 SP65 断面 (北から)



5. 15-1 区 SP66 断面 (北から)



1. 15-1 区 SI 1 全景 (南から)



2. 15-1 区 SI 1 北壁断面 (南から)



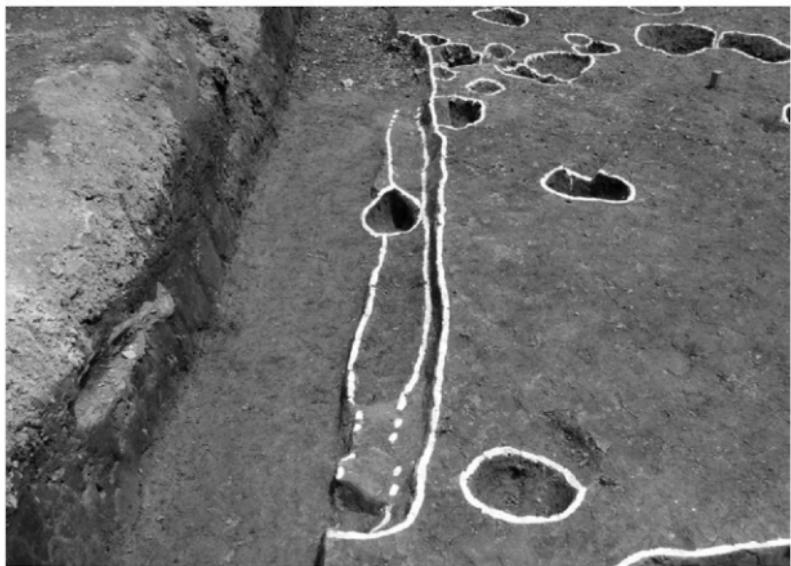
3. 15-1 区 SI 1 畔断面 (東から)



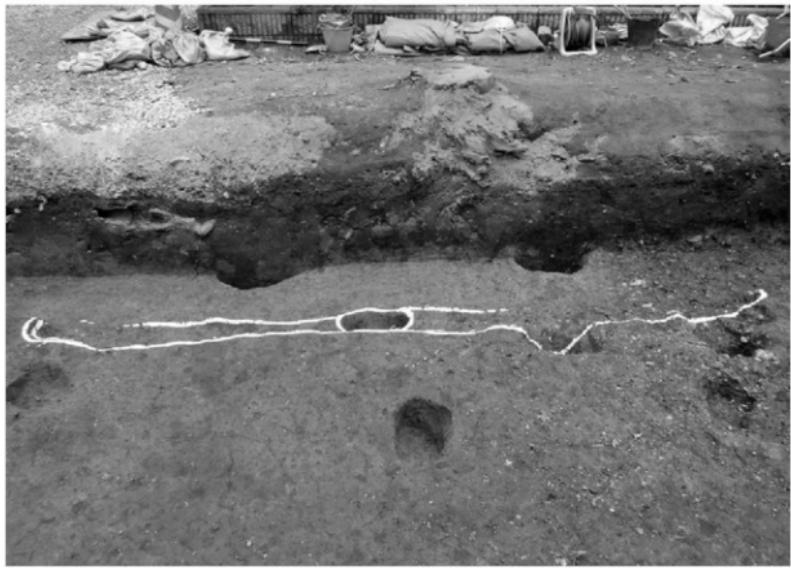
4. 15-1 区 SI 1 土器出土状況 (南東から)



5. 15-1 区 SI 1 土器出土状況 (西から)



1. 15-1 区 SI 2 全景 (北から)



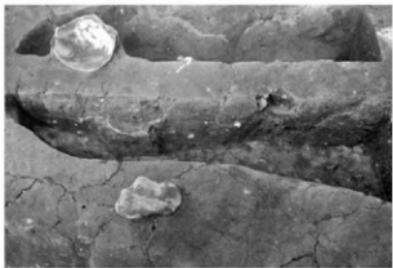
2. 15-1 区 SI 2 東壁断面 (西から)



1. 15-1 区 SK 2 検出・土器出土状況（西から）



2. 15-1 区 SK 2 完掘状況（南から）



3. 15-1 区 SK 2 南北畔断面（西から）



4. 15-1 区 SK 2 南北畔断面（西から）



5. 15-1 区 SK 2 東西畔断面（北から）



1. 15-1 区 SK4 東西畔断面（南から）



2. 15-1 区 SK4 東西畔断面（南から）



3. 15-1 区 SK4 東西畔断面（南から）



4. 15-1 区 SK4 南北畔断面（西から）



5. 15-1 区 SK4 土器出土状況（南から）



1. 15-1 区 SX2 南北畔断面（西から）



2. 15-1 区 SX2 南北畔断面（西から）



3. 15-1 区 SX2 南北畔断面（西から）



4. 15-1 区 SX2 東西畔断面（南から）



5. 15-1 区 SX2 東西畔断面（南から）



1. 15-1 区 SX3 全景 (西から)



2. 15-1 区 SX3 南北畔断面 (東から)



3. 15-1 区 SX3 南北畔断面 (東から)



4. 15-1 区 SX3 東西畔断面 (北から)



5. 15-1 区 SX3 東西畔断面 (北から)



1. 94-2 区 包含层出土土器



1. 94-2 区 包含层出土土器



27



28



29



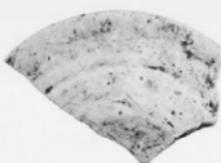
31



22



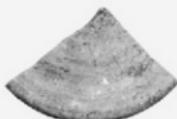
24



30



32



33

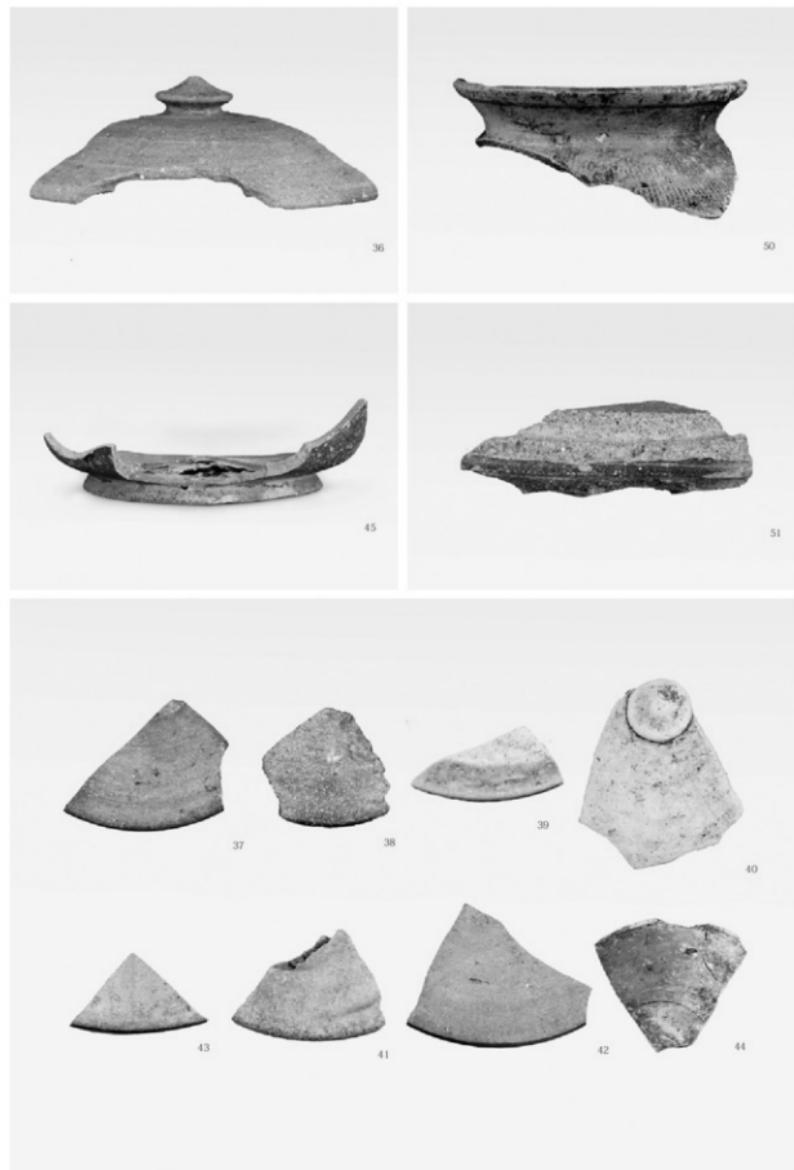


34

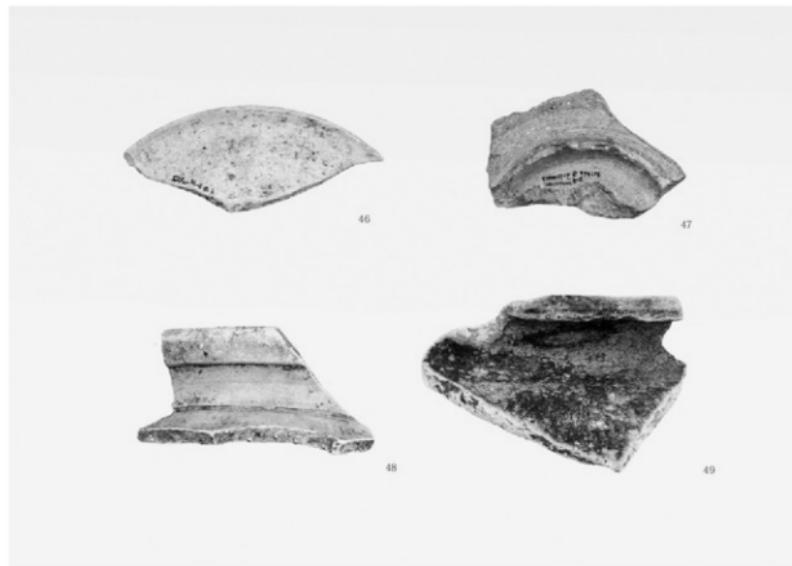


35

1. 94-2 区 包含层出土土器



1. 94-2 区 包含层出土土器



1. 94-2 区 包含层出土土器



2. 94-2 区 SP6 出土土器

3. 94-2 区 SP6 出土土器



4. 94-2 区 SP10 出土土器

5. 94-2 区 SP42 出土土器



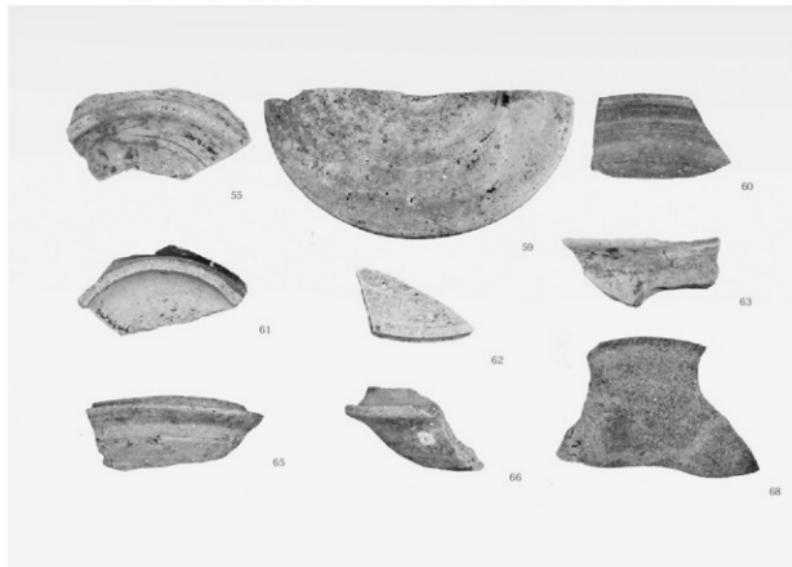
1. 94-2 区 SP43 出土土器

2. 94-2 区 SP43 出土土器



3. 94-2 区 SP46 出土土器

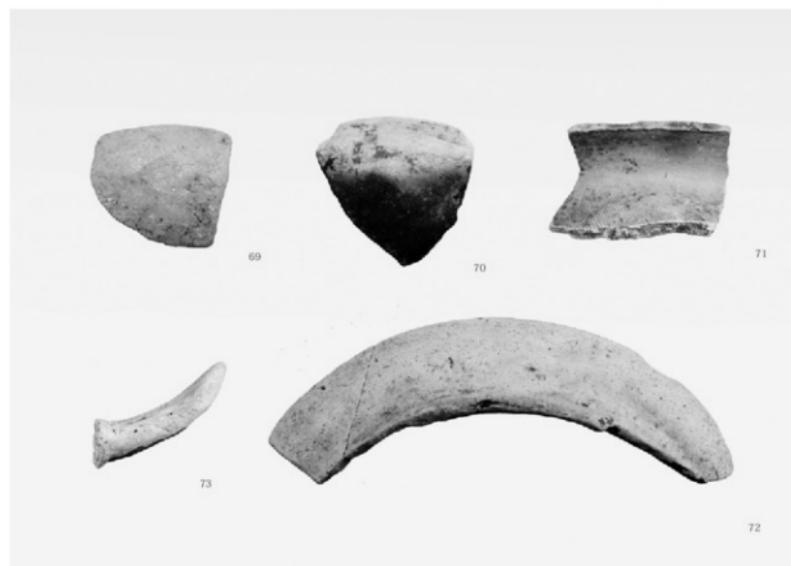
4. 94-2 区 SP75 出土土器



5. 94-2 区 SP11 · 44 · 45 · 46 · 58 · 75 出土土器



1. 15-1 区 包含层出土土器



1. 15-1 区 包含层出土土器



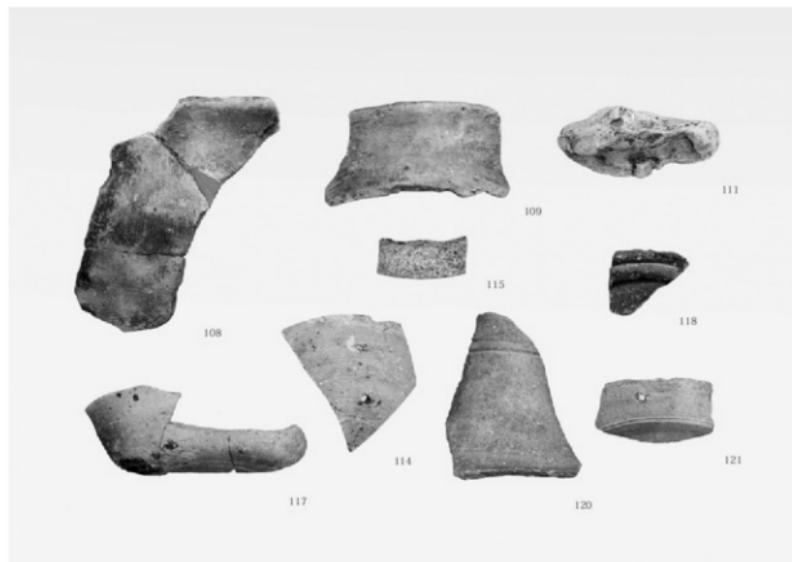
2. 15-1 区 包含层出土土器



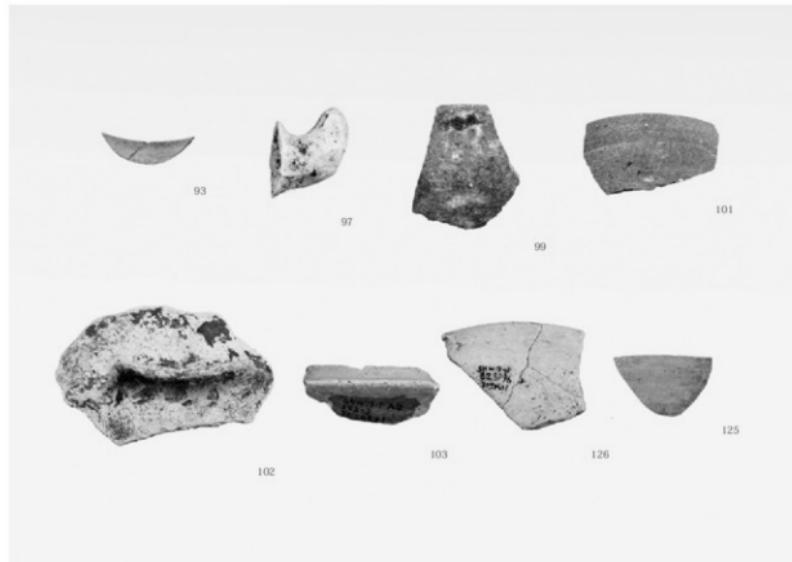
1. 15-1区 SB2、SI 1、SK2・4、SX2 出土土器



1. 15-1 区 SX2・3、SP96 出土土器



1. 15-1 区 SX3 出土土器



2. 15-1 区 SI 1, SK4, SX2, SP89 + 96 出土土器

報告書抄録

茨木市文化財資料集 第67集

宿久庄西遺跡 1

発行日 平成28年3月31日

編 集 茨木市教育委員会

〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号

電話 (072) 622-8121 (代表)

発 行 茨木市教育委員会

印 刷 株式会社トウユー